

# 一般財団法人日本アジア振興財団（JAPF）

## 2018 年春期インターンシップ論文集

期間：ベトナム及びカンボジア 2018 年 2 月 18 日（日）～3 月 1 日（木）

カンボジア 2018 年 3 月 4 日（日）～3 月 11 日（日）

対象国：ベトナム社会主義共和国及びカンボジア王国

参加人数：53 名

男女割合：男 16 名、女 37 名

日本国籍者：51 名 台湾国籍者：1 名 韓国国籍者：1 名

参加大学：岩手大学、茨城大学、東日本国際大学、明治大学、早稲田大学、専修大学、常葉大学、昭和大学、文教大学、中央大学、福井大学、岐阜大学、東海学園大学、名古屋市立大学、名古屋学芸大学、奈良教育大学、京都文教大学、京都大学、同志社大学、同志社女子大学、京都女子大学、関西大学、大阪府立大学、大阪教育大学、神戸大学、神戸市外国語大学、鳥取大学、広島工業大学、北九州市立大学、九州大学、筑紫女学園大学、宮崎大学、宮崎公立大学、大分大学、志學館大学、長崎県立大学

帰国後の活動：（関西での修了式）

日時：3 月 27 日（火）14：00～15：00

場所：大阪 在大阪カンボジア王国名誉領事館

（関西での事後研修会）

日時：3 月 27 日（火）16：00～17：00

場所：大阪 日本アジア振興財団事務所

（関東での修了式及び事後研修会）

日時：3 月 19 日（月）15：00～18：00

場所：東京 JICA 地球ひろば

（福岡での修了式及び事後研修会）

日時：3 月 30 日（金）14：00～17：00

場所：博多 リファレンス駅東ビル



一般財団法人日本アジア振興財団  
Japan Asia Promotion Foundation

発行：一般財団法人 日本アジア振興財団学生委員会

## 【支援のかたち】

大阪教育大学 教育学部 2年生

私は、今回のツアーでの研修先訪問や参加者とのディスカッション、現地での多くの出会いや経験を通して、新たな知識、そして様々な見解を得た。中でも「知る」ということの重要性を大きく実感した。相手についてちゃんと知らなければ誤解が生まれ、それによって関係が悪化してしまうということ。それは人同士でも、国同士でも言えることだ。

相手がどういった支援を求めているのか、そして日本とどういった関係を築くことが理想的なのか、その点については大きく考えさせられた。「支援を受けることによって自分たちが貧困であることを知らされてしまう。」どこかできいたこの言葉がとても印象的だ。その国その地域に住んでいる全員が同じ気持ちであるとは限らず、いまの生活に満足し幸せを見出していた人々が余計な支援によってその幸せを失ってしまう場合もある。私は今までそのような考えをもったことがなかったが、実際にカンボジアを訪れ街の活気や子どもたちの笑顔を目にしたとき、彼らが当たり前のように楽しく過ごしているこの環境は絶対に壊してはいけないものだと感じた。

とはいえ、もちろん貧困による問題がないわけではない。ベトナムやカンボジアで実際に訪れて分かった病院の衛生環境の悪さ、観光地で子どもに商売をさせて稼ぐ家族。そして孤児院や学校、ゴミ山を訪れた際、その時私たちの目に映ったのはいきいきとしている子どもたちの姿だが、裏で浮かび上がるのは栄養失調や病気などの健康上の問題、家庭環境の問題であり、単純に見ただけではわからない問題も解決していく必要があると感じた。

ところで、「支援」という言葉をきいたとき、今までの私の中でぱっと思い浮かんでいたのは、食料や服を与えたり、学校を建てたりといったよくテレビなどで目にするような物質的な支援だった。しかしそれだけでは本当の支援につながらない、ということを経験した。一時的な支援ならば比較的簡単なことかもしれない。また、それによって救われる人もいるだろう。だが彼らの将来や国の未来を考えたとき、それは意味をなさないのではないか。国自体が自立し、どの国とも対等な関係を築き協力していく社会こそが目指すべきものであり、その手助けをするのがいまの日本がすべき「支援」なのだ。

そして、このツアー中で最もよく耳に残っている言葉が「選択肢の幅」である。先に述べたように、「知らなければ幸せだ」ということもあるだろう。しかし「知らない」ということは、彼らの可能性を狭めていることと同じではないか。家の中や路上での生活しか知らないような子どもたちが孤児院に入ることによって、人とコミュニケーションをとる楽しさ、あるいは学ぶ面白さを知るかもしれない。それをきっかけに彼らの見える世界が変わっていくだろう。そういった「知る」機会を与えることにより、彼らの中の選択肢を増やしたいと感じた。

このように、今まで自分が思っていた「支援」と実際に必要とされる「支援」の違いを考え、もっと国について知ることが今の私にとって大切だと感じた。このツアーで目にしたこと、耳にしたこと、そしてその時々感じた気持ちを忘れず、これらを生かして自分が将来社会でどう役立っていけるのかをこれから考えていきたい。

## 【カンボジアで感じたこと】

鳥取大学 農学部 2年生

私はこのベトナム・カンボジア 12 日間のスタディツアーを得て、日本は本当このままでいいのかと感じた。その理由は主に 2 つある。

1 つ目は、カンボジアの町の風景を比べて見て感じたことである。カンボジアのプノンペンやホーチミンといった大都市とバスの中で見た田舎や実際に行った市街地から少ししか離れていない農村の差を見て、下のラインは違うかもしれないが日本の東京や大阪のような大都市と地方の差とあまり変わらないのではないかと感じた。今、日本では少子高齢化が深刻な問題となっており、また過疎化も進んでいる。このままでは大都市ばかりに若い人が集まり繁栄していき、地方には若者がいなくなり衰退していく。そして、差はカンボジアで見たものよりもひどく大きなものになってしまうのではないかと感じた。また、ツアーの参加者との話としていても東京や大阪と地方の差は思っていたよりも大きいものだと感じた。東京などでは当たり前の店、出来事が私にとっては発展しているように感じ、同じ日本だというのに違う世界のものだと感じてしまうことがあった。私はカンボジアの支援をする前に日本のこの差をどうにかしていかないと日本はやばいのではないかと感じた。

2 つ目は、日本人の情報不足である。カンボジアという国は貧しい国としてテレビやネットなどのメディアで流されている。私も実際カンボジアはとても貧しい国という認識をしていた。しかし、実際カンボジアに来てみると町はとても繁栄していて、高いビルやネオンもたくさんあり夜はとても明るかった。実際、日本に帰ってきて友達にカンボジアってどんな国のイメージか聞くと、日本がたくさん支援している国だとか貧しい国という人たちがたくさんいた。この認識の差はとても怖いと感じた。カンボジアは国際競争の真ん中にいてとても豊かであるのにもかかわらず、日本人だけが貧しいと思って支援を続けてしまっている。私はこの認識に気が付いたとき、もしかすると、カンボジアだけでなくほかの国でのまちがった認識をしまっているのではないかと感じた。しかし、この認識の違いに気づいていない人たちがたくさんいる。この人たちの認識の違いを正しく直さなければすぐ東南アジアの国に抜かされて、日本が支援を受ける側になる可能性があると感じた。

まとめると、日本人は自分たちがとても進んでいる国に住んでいて、日本人であることにとっても強い優越感を持ってしまっているのではないかと感じた。自分たちが本当はどういう状況にいるのか知ることが大切だと感じた。私は、このツアーで浅野さんや倉田さんのように自分の人生をかけて他人のために頑張ることはとても出来ないと感じた。農村で「自分にしかできないことで本領を発揮する」ということを聞いて、自分になにしかできないことを見つけていくことから始めようと思った。

## 【意識改革の原点】

神戸大学 経営学部 1 年生

今回のツアーに参加して、学んだことがどれほどあったらう。まず旅を共にした仲間。年齢に関係なく自分の意見をしっかり持っていて、その上で研修において感じた疑問や発見にとことん追求していく。私を感じたこと以外の意見がどんどん出てきて自分の無力さも感じた。でもそうしているみんなの姿は本当に輝いていて、自分も頑張らなくてはという気持ちに何度させられたらうか。本当に出会えた事に感謝してもしきれない。

次にカンボジアという国について。出発前は世界史で少し学んだくらいでほとんど知識がなかった。しかし実際に足を運んでみると、想像以上の人々の温かさがあつた。街を歩いていて目が合うと微笑んでくれたり手を振ってくれたり、中には投げキッスしてくれる人まで。なんと温かい国だらう。日本では到底見られない光景だらう。カンボジアの人々をただでカンボジアが大好きになった。また、カンボジアへの支援というものを考えるきっかけになったのが王宮の前で出会ったストリートチルドレンだ。私は子供たちが可愛かつたし可哀想だと思つたから子供たちの商品を買つたが、みんなの意見は様々だつた。子供たちを見たときにカンボジアの経済や子供の教育など全く考えていなかった自分に不甲斐なさを感じた。と同時に自分たちが今していることは何なのだらうと疑問に思つた。でもそこから私はもっと主体的にカンボジアのことをしっかり学ぼうという気持ちになれた。

それからの研修で 1 番印象に残っているのが子供たちの笑顔。平和村、日本語学校、孤児院、フリースクール。どこに行つてもどんな境遇を抱えていても子供たちの笑顔は本当に可愛くて純粋だつた。言語が通じない子も、笑顔で走つてきたり服をひっぱつてきたり。本当に笑顔は万国共通だらう。しかしここで痛感したのが「教育の格差」だつた。驚くほど元気で学びへの情熱を感じた日本語学校とほとんど英語も日本語も通じない農村部のフリースクール。環境面と経済面での差から教育にどれだけの差が出ているのか。私たち日本人からの視点で一概にきちんと教育されていない農村部が良くないとは言い切れないが、やはりカンボジアの将来を担つていく子供たちには教育格差というのは大きな大きな問題だらう。さらにカンボジアの実状を学んでいくと最終的にはいつも「お金がない」というところに落ち着く。インフラ整備や教育制度改革などには莫大なお金がかかる。それを私たち日本や他国が援助することでカンボジアが徐々に発展していく。

今私たちが訪れたカンボジアはまだまだ発展途上だが、人々の心の豊かさは先進国以上だと思つた。だから国の経済の豊かさも備われれば、カンボジアは無敵の国になれるのではないか。日本人もカンボジア人を見ると日本人が忘れかけている何かを思い出せるのではないだらうかとも思つた。それほどカンボジアは私にとって素晴らしい国になつた。

## 【見ることの重要性】

北九州市立大学 外国語学部 2 年生

私は、JAPF スタディツアーに参加して、実際に見て、感じるということの重要性を強く感じる事ができた。というのも、大学のどの講義で聞いた内容よりも、どの本で読んだ内容よりも、多くのことを学び、考える事ができたと感じているからである。

まず、ベトナムでは、主にベトナム戦争に関する研修先を回ったが、ベトナム戦争の経緯や死者数などベトナム戦争については、日本で何冊か本を読めば学ぶことができる。しかし、戦争博物館を訪れて、日本人を含むアジア人の少なさ、いわゆる白人と呼ばれる方たちの多さなどを見て、戦争に対する私たち日本人の関心の薄さに気が付いた。現在、ベトナムを訪れる日本人観光客は年々増加傾向にあり、昨年は 60 万人以上の日本人がベトナムを訪れた。しかし、ネットで「ベトナム 観光」と検索すれば、リゾート地ばかりが出てくることからわかるように、私たち日本人は、ベトナム戦争という歴史を無視し、ただ単にベトナムをリゾート地として捉え、戦争を学ぶ機会を自ら手放しているのではないかと感じた。このことから、日本人に戦争について考えてもらうには、学校教育において戦争について学ぶ機会を増やせばいいのか、中間にいる私たちが戦争を伝えていくべきなのかということ、実際に見ることで考えるきっかけを得ることができた。

そんな中、見ることの重要性を研修先以外でも感じる機会があった。シェムリアップのナイトマーケットでの韓国大学生との交流である。現在、大学で第二外国語として韓国語を専攻しており、そこで「ニュースだけが韓国の姿じゃない。特に若い世代は日本にとっても興味を持っていて、これからの日韓関係は必ず良いものになる」と繰り返し聞かされた。しかし、教授以外の韓国人に触れたことのない私は、「韓国人が日本人に対して良い印象を持っているはずがない」と考え、教授の言葉を信じられないでいた。そこで、自分の韓国語力を試す目的もあったが、ナイトマーケットで韓国大学生と実際に会話をしてみた。すると、嫌な顔をされるのではないかとこの予想には反して、「おー！日本人！韓国語上手だね！」と片言の日本語で受け答えをしてくれて、私の韓国人へのイメージは 180 度変わった。彼らは、ニュースなどで見る反日的な感情は一切出さず、それどころか、日本語を話し、いつか日本を訪れたいとまで話してくれた。もしこの時、実際に韓国人と話してみることがなければ、今も、韓国人に対する認識は変わらなかつたろう。

JAPF スタディツアーを通じて、見ることの大切さ以外にも、仲間の大切さを学んだ。これまで、友達はたくさん作ってきた。しかし、共に学び、楽しみ、時には意見をぶつけ合う仲間にはじめて出会い、たくさんの影響を受けた。JAPF ツアーはこれで終わるが、自分の学びはここがスタートになるよう、これからも仲間たちと切磋琢磨していきたい。

12 日間、本当にありがとうございました。

## 【ツアーを通して学んだこと】

京都文教大学 総合社会学部 3 年生

このツアーに参加してみて数えきれないほどたくさんのことを学ぶことができた。その中で私自身、印象に残った三つのことを取り上げる。

一つ目は、カンボジアの現地の子供たちの笑顔だ。ツアーに参加する前は、貧しく学校にも行けずかわいそうだと思っていた。しかし子供たちの笑顔を見て今までの考えがふっ飛んだ。日本の子供たちより元気で、何より幸せそうだった。KURATA ペッパーの倉田さんの言葉を借りるなら、「カンボジアの人はハツラツと生きている。日本人は生かされている。」本当にその通りだと思った。経済的な豊かさと、精神的な豊かさや幸福度はあまり関係がないことを実感することができた。世界の資本主義的な社会の流れの中 20 代の今、そのようなことを実感することができ、本当に良かった。では本当の豊かさ、幸せとは一体何だろう。その答えはこれからの人生で見つけていこうと思う。

二つ目は、同じ参加者の考えの深さに驚いたことだ。私は感銘を受け「意識が高い」という言葉で彼らを褒めた。すると彼らは激怒した。意識が高いという言葉は排他的、差別的に感じるのだという。「そのように意識が高い人という枠組みに入れてしまうから日本人一人一人が国際協力や支援について、考えをストップさせてしまうのだ。」これが彼らの言い分だ。この言葉を聞いた瞬間、自分の考えの低さに対して情けなさを感じた。それと同時に、もっと彼らから刺激を受けたいと素直に思った。そして、私も彼らに刺激を与えたいと思った。彼らと 12 日間仲間として過ごすことができたことを誇りに思う。

最後の一つは、物乞いの子供たちだ。12 日間で一番印象に残っていることだ。王宮の前で集合写真を撮った後、友達と川の辺りまで歩き、ベンチで少し休憩をしていた。すると二人の小さな女の子が私の膝の上に座ってきた。素足でボロボロの服を着て、いかにも物乞いの子供というような見た目だった。話を聞いてみると 2 ドル欲しいのだという。2 ドルくらいなら、と財布に手を伸ばしたが、お金をあげるとは正しい行為なのか分からなくなり財布に伸ばした手を引っ込めた。最終的には 2 ドルをあげた。すると、オークン(ありがとう)と何度もお辞儀をされた。その 2 ドルを受け取ると近くにいた母親の元まで走って行き、その 2 ドルを渡していた。母親に褒められた子供たちは、本当にうれしそうな顔をしていた。満面の笑みだった。母親も嬉しそうだった。その光景を見た瞬間、また分からなくなってしまった。ホテルにつきベッドの上で改めて考えた。誰が悪いのか、お金を渡した私自身か、自分が何をしているのかも理解できていない子供たちが悪いのか、そうしている母親か。しかしそうでもしないと、その子供たちを生かし、生活させていくことができない。カンボジアの国、社会が悪いのか。世界が悪いのか。いくら考えても答えはでなかった。日本に帰国した今でも答えは出ていない。だが、自分がこれから何をすべきか分かっている。周りの人間にそのような現実があることを伝えること、もっと国際協力について知ること、現地で起業するために知識を増やすこと(会社として成り立てば現地



の人の雇用を増やすことができ、結果的に物乞いの子供たちをなくすことができる)など挙げたらきりが無い。これからやらなければいけないことが山積みだ。大変なことかもしれない。だが不思議とワクワクしている自分がある。今までこんなワクワクしたことがあったらどうか。こんな気持ちにさせてくれたカンボジアの国、現地の人々に感謝したい。

12 日間お世話になった人たち、JAPF の方々に本当に感謝している。ありがとうございました。

## 【カンボジアで感じたこと】

京都女子大学 発達教育学部 1年生

空港を出ると、ムワツとした熱気、行き交う人々、バイク、車、見上げるとビルが立ち並ぶ。日本とは違う空気にこれからの研修の始まりを感じた。そして今、この研修を終え感じるものが2つある。一つ目は、国や政治という大きな枠組み、もう一つは、人々、子どもといった目の前の小さな枠組みである。

まず、大きく捉えると、政治についての中国との関連だ。バイオン中で、ポルポト政権の話を知った。ポルポトと聞けば負のイメージが強かったが、国が発展していくための手段として原始共産主義に至ったという話を聞き、本当の平和とは何かと考えさせられた。また、ポルポトが原始共産主義に至った背景には中国の毛思想が影響している。中国とは、今の政権の問題も関わりがあり、倉田さんが「選挙の結果次第で先行きが分からない」と話されていたことを思い出した。

今の政権に中国の存在が大きいことは明らかだが、中国がカンボジアに進出し、経済面で大きな影響を与えていること、カンボジアでは第二言語で中国語を選択する人が多いことも事実であることを踏まえると、国の方針がどうあるべきなのか、他国との関わり方の正解を出すのは一筋縄ではいかないということがわかる。

また、このことは地雷博物館でもひしひしと感じることになる。それは、地雷処理に対して政府は補助金を一切出さないということだ。この背景には、他国からの金銭的援助を得るといった目的がある。両面性の観点からすると、ゴミ山も同様だ。ゴミ山を取り除くことは衛生面で非常に大きな意味を持つが、そこではたらき職を得ているスカベンチャーの人々の暮らしを考えると職を失うことにも繋がっていく。

私は、カンボジア研修で、人の価値観、善悪を決定する判断の難しさを感じた。政府の方針が経済支援の動きに結びつくことを知った。

次に、小さな枠組みで言えば、やはりカンボジアの人々の人柄の良さである。日本語学校では、生徒の学ぼうという視線が熱く、孤児院、農村では子どもたちが目をキラキラ輝かせていた姿が印象的だった。ディスカッションで取り上げたように、カンボジアの人々には心の豊かさがあると思った。技術が進歩し、多様性が欠如している現在だからこそ、自分が目の前で見た光景を大切にしたいと思った。

最後に、カンボジアは、自分が想像していたより遥かに発展していた。しかし、都市部と農村との格差、ゴミ処理問題、歴史等多くの問題を抱えていることも現実問題として根深い。その中で、次世代にこの問題をどう繋いでいくのか、どう教え、考えていくのかと言ったことが重要になると思う。また、教育の立ち位置の大きさを改めて感じた。将来、教員を目指す一人として、私は、これからの国を担う子どもたちに未来と希望を与えられる教育の在り方を考えていきたいと思う。そして、カンボジアで出会った人々のことを忘れず、またこの場所を訪れたいと思った。

## 【世界の共通言語】

関西大学 政策創造学部 2 年生

今回のスタディツアーで感じたことで一番大きなものといえばタイトルにもあるように世界の共通言語は笑顔であるということである。

自分は日本にいるときも笑顔であることは大切なことだと考えているので自分も笑顔であるように心がけているし、周りの人たちを笑顔にすることも大事に思っている、それはこのツアー中も同じで参加者のみんなをはじめ、引率の方々、ガイドさんそして現地の子どもたちや貴重なお話を伺った皆さんすべてが笑顔であることは何よりも素晴らしいことだと感じた。個人的にはこのツアーに参加する決め手となったカンボジアの子どもたちとの触れ合いの中で生まれた笑顔はとてもきれいで一生忘れることのできないものであった、しかしその笑顔が本心から出ているものであるかというのも心のどこかに引っかかっているのも事実である孤児院で出会った子どもたちは親から十分な教育や生活を受けることができないためあの孤児院に集まっている、そんな現実を知ってしまうと何不自由なく大学生になった自分はどれだけ苦勞を知らずにここまで生きてきたのだろうかということを考えてしまう。もちろんこのツアーの中には笑顔になれない部分も多くあった、自分が事前学習で調べたトゥールスレンやキリングフィールド、HIV 病院、ゴミ山、地雷博物館など日本では考えられない光景が周り一面に広がっていてショックが大きかった。それらの背景にはポルポト政権があることも関係していてより複雑に物事が絡み合っているという風を感じた。自分たちが行った研修先での貴重な話は全て本を読むだけでは得られない知識ばかりであり、その場の温度、におい、目に見えるものすべてが貴重で本当に日本では味わうことのできない経験ばかりだった、これらをすべて自分たちが他の誰かに伝えていくことはとても重要でありカンボジアのいいイメージを広げることの第一歩であるのではないかと考えた、そしてそれらを伝えるときにはなるべく笑顔でポジティブな意見を含めることが大事でここでも笑顔が一つの大事なキーワードとして出てくる。

アンコール遺跡を見たときのみんなの表情は研修の後半で疲れがたまってきたのにもかかわらず自然とあふれ出る笑顔だったことがとても印象に残っている、みんなと撮った写真を見返しても本当にいい表情をしていてとてもいいツアーだったということがよくわかる。

このツアーを企画してくださった方々に本当に感謝していて同時に一緒にツアーに参加した仲間や引率の皆さん、ガイドさん、運転手さん、貴重なお話をしてくださった研修先の皆さんそれぞれみんなに笑顔で感謝の気持ちを伝えたいしもう一度出会えることを楽しみにこれからも日常の生活を送りたいと思う。短い間でしたが本当にありがとうございました。

## 【ベトナムとカンボジアから学んだこと】

東海学園大学 スポーツ健康科学部 1 年生

私がこのツアーに参加しようと思ったのは、自分の目で世界の現状を見て将来に生かしたいという事と、学生の時にしかできない経験をしようと思ったからである。実際に足を運んでみることによって様々なことを学ぶことができた。大きく 2 つに分けて挙げようと思う。

一つ目はカンボジアは決して貧しい国ではないということだ。私がこのツアーに参加する前までのカンボジアのイメージは、殺風景で道路が整備されていないなど不便な面が多かった。だが、実際は高層ビルが立ち並んで、ショッピングモールもあり、町中が賑やかでキラキラしていた。5割を他国の支援でまかなっている国なので、自分たちの利益などの為にカンボジアが豊かだと思われるのがまずいと思っている企業が多いと聞いた。それを聞いた瞬間、自分が固定的な概念からしか物事を見ていないことに気づいた。また、カンボジアの孤児は家が貧しくて両親のいない孤独を抱えたイメージだったが、一緒に遊んで触れ合ってみると目が輝いていて、笑顔からは希望や楽しさで胸を膨らませているのが伝わった。その笑顔を見ると、裕福でないから幸せでないとか、両親がいないからかわいそうとか思っていた自分が恥ずかしくなり、考えが 180 度変わった。

二つ目は歴史が今に繋げる影響である。ベトナムの戦争証跡博物館では、ベトナム戦争での目を背けたくくなるような写真や、展示物があり戦争というものを肌で感じる事が出来た。そしてカンボジアのポルポト政権大量虐殺についてである。あんなにも残酷で悲惨なものなのに今のカンボジアの子供達は教科書 1 ページ程度しか学ばないので、あまりカンボジア人はポルポト時代のことを知らないという現状がある。ベトナムでもカンボジアでも欧米人の観光客が多いことに驚いた。どんな気持ちで訪れたのだろうかと思うと同時に、日本人の戦争に対する意識の低さや他人事としてとらえている人の多さに焦りに似たものを感じた。

更にツアーを通して価値観の多様性について考えることが出来た。日本での当たり前の生活がカンボジアにとっての当たり前ではなくても幸せや豊かさは人の感じ方によって違って、私にはカンボジアの方が幸せそうに思えた。Sui-joh の浅野さんに「今自分の人生を生きているといえますか。」と言われた時自分自身に問い詰められたように感じた。

いい企業に入るために勉強して大学に通っている私は国に生かされていて、クーラーも冷蔵庫もなく、たった 3 ヶ月前に電気と水道が通ったにもかかわらず、カンボジア人は心が豊かで自分たちで生きていたからだ。人生は言い訳している間に終わってしまう。だからこそ、自分の目で見て肌で感じたことを伝え、将来に役立てたいとツアーを通じて強く感じた。そして言葉は通じなくても一緒に笑い合い楽しめたスポーツの魅力について深く勉強すると同時に国際協力を日本の文化にすることをこれからの目標にしていきたい。

## 【カンボジアで学んだこと】

神戸大学 経営学部 1 年生

今回このツアーに参加してみて、実際に現地に行き、自分の目で見て、肌で感じる事が本当に大切だと痛感した。このツアーに参加する前は、今ならどの立場で話しているのかと自分に突っ込みたくなるが、カンボジアに対して、貧しく、環境があまり整っておらず、治安があまり良くないというイメージを持っていた。

しかしカンボジアは、行く場所によって、顔が全然違う国であった。そして、どこにいても人の活気で溢れていて、本当に魅力的であった。私が出会ったカンボジアの人々はみんな生き生きしていた。

まず都市部は街自体がキラキラしていて、私の想像していたカンボジアとはかけ離れていた。よく“発展途上国”という風に呼んだりするけれど、どこにもそういったことを感じさせる要素が見当たらなかった。

一方で農村部は日本とはかけ離れていたが、そこに住んでいる人々はみんな笑顔で、自分たちの住んでいる村に急に外人が入ってきたという感じなのに、快く私たちを受け入れ、挨拶などしてくださった。私のイメージしていた、“貧しさ”はどこにもなかった。むしろ、農村部に住んでいる人たちは家族かわからないが、親密そうな関係の人々と過ごし、とても楽しそうで、なんともいえない温かさがあって、むしろ日本に欠けているものがカンボジアにあるように感じた。

孤児院や平和村の子供たちも、その子供の背景を感じさせないくらい元気な子が多く、衝撃的だった。

日本はカンボジアに比べ、環境も整備されており、衛生面では良いかもしれないけれど、本当に豊かとはいえないと思った。モノや情報で溢れる日本は、どんどん人と人の関係が希薄になっている一面もあるといえるし、また、満員電車で揺られるサラリーマンの人々を例に挙げると、生き生きしている顔の人を私はあまり見たことがない。

今まで私は、イメージや世間の風潮からくる偏見で物事を見ていたのだなと、はっとさせられた。そこに住む人が幸せかというのは、主観でしかわからないことであり、現状を何も知らないなら、何も語れないと思った。

とはいってもカンボジアには貧富の格差や教育面など解決すべき問題がまだまだあるのも現状である。私は国際協力関係の仕事がしたいと思ってツアーに参加したのではないが、今回をきっかけに、どういった相手のために将来働きたいのか考え直すきっかけになった。

私はカンボジアが好きな国となった。何らかの形で、そこに住む人々の幸せをより一層増やそうようなことが出来たらとも思った。今後、関わっていきたいと感じた。

なにより今回のツアーでは、引率のお二人や、参加者から学ぶところが多かった。みんな個性豊かで、しっかり自分の意見を持っていて、面白くて、尊敬できる素敵な人たちばかりだった。ディスカッションでは自分が考えもしなかったような考え方にはっとさせられ、刺激をたくさん

ん受けた。自分は何をどうしたいのか、自分自身を見つめ直すきっかけにもなった。一方で、様々な考えや価値観に触れ、悩むことも多かったが、結局は自分の意見を持つことが大切だと気づくことが出来た。遊ぶときは遊び、やるときはやる、熱意を持ったメンバーと過ごした12日間は私にとってかけがえのないものだ。日本に帰ってからもずっと交流を続けたいと思える仲間に出会え、また様々な思いになれたり、経験できたりして本当にこのツアーに参加して良かった。このメンバーで様々なことを経験し話しあえて、今まで生きてきた中でこんなに濃い12日間はないと思う。これから困難があったとしても、全国各地でみんな頑張っていると思うと、乗り越えられる気がする。このツアーをスタートに、これから進んでいきたいと思う。

## 【幸せとは】

茨城大学 人文社会科学部 1年生

このツアーに参加する前まで、私の中のカンボジアのイメージは、貧しくてあまり恵まれていない国といったものであった。実際、交通環境や冷房設備、トイレ、シャワー等に関しては日本と比べ、不便さを感じるが多々あった。しかし、カンボジアは私が想像していたよりもずっと豊かさのある国であった。

最も衝撃を受けたことは、都市部の発展度合いである。大型の商業施設や高層ビルが立ち並び、高級車が行き交っていた。中国人向けのマンションの建設予定地がいくつもあり、数年後の風景は大きく変化するように思われた。その傍らで物乞いをしている人々の姿も見られた。貧富の格差が広がっていた。発展していく上で免れることができないことであると思うが、このような格差を少しでも埋めていくために私たちにもできることがあるのかを改めて考えるきっかけとなった。

一方で、農村部は最近になってようやく電気が通り始めたと聞いた。農村で暮らす人々はほぼ自給自足であるが、何不自由なく暮らしているようである。自分たちが消費するものは自分たちで生み出し、余剰が出ればそれを売る。無駄のない生活である。農村で暮らす人々は、ゆったりとした時間の流れの中で、自然に囲まれて、皆幸せそうに見えた。子供たちの弾けるような笑顔が眩しかった。

豊かさとは、何も物質的なものだけを指す言葉ではないと思う。日本を含めた先進国で生きる人々は、豊かさを経済的なものであると考えて、それを求めて努力し続けてきた。しかし、機械化、情報化した社会によってストレスを感じている私たちの生活よりも、途上国の悠々とした生活の方がずっと豊かであるように感じた。そこには心の豊かさがあった。

このツアーを通して、本当に必要とされている支援は何なのか改めて考えさせられた。幸せの感じ方は人によって異なり、幸せのかたちもそれぞれである。私たちの環境や文化をベースにして途上国の人々の幸せまでも勝手に判断してはいけない。自分たちの価値観を押し付けた支援をするのではなく、現地の人々が本当に必要としているものは何かをよく考えることが重要であると感じた。そのために、支援する側は、現地の人々の考えを徹底的に聞き取り、彼らの価値観や求めていることを正確に理解することから始めるべきである。

最後に、引率、現地のガイドや運転手の方々、JAPFのスタッフの皆さんのおかげで有意義な体験ができました。今回のツアーの中で自分の目で見えたこと、現地に実際に行って感じる事ができたことを今後の勉学にも生かしていきたいと思えます。本当にありがとうございました。



## 【カンボジアで学んだこと】

志學館大学 法学部 2 年生

カンボジアを訪れて、驚くことが多くあった。まず、学ぼうとする姿勢だ。TAYAMA 日本語学校で、プレゼンをした際、私たちの発表を生徒が熱心に聞いていた。その目や表情から、学ぼうとする意欲が伝わってきた。一緒に夕食を食べた生徒から毎日の勉強の様子を聞くことができた。自分が自由に使える時間のほとんどを日本語の勉強に充てていた。日本では、自由に好きなことをでき、学ぶ環境が整っている。私は、ここまで熱心に何かを考えたり学ぼうと考えたりしたことがあったのだろうか。自分の学ぶ姿勢について考える機会となった。次に、カンボジアの子供の様子だ。観光地で、絵ハガキやガムを売り、歩いている子がいたり、12、3 歳に見える子がレストランで働いていた。一番衝撃的だったのが、バスに乗ろうとした際、複数の子が近寄ってきたことだ。その子たちは悲しそうな顔をし、私に両手を差し出した。お金や、食べ物を貰いたかったのだろうか。近くにいたガイドさんはあまり驚いていなかった。日本では想像もつかないことであり、心が痛くなった。一方、孤児院や農村で出会った子供たちは明るく、笑顔が輝いていた。この点は、日本の子供たちと変わりはなく、接するなかで、たくさんのエネルギーをもらった。

医療の面からカンボジアをみると、医師になるための過程が緩いことや、医者不足、国民の医療に関する知識が十分でないことが問題として挙げられた。また、カンボジアではリハビリや患者に対する心のケアはなされていなかった。HIV 病棟を訪れた際に、患者の口からは、生きる希望などは聞くことができなかった。心をケアすることが、今後の支援で重要になるのではないかと考えた。教育の面でみると、十分な教育が受けられていない子供もいた。他国からの支援で学校が作られ、教育を受けられる子供が増えてはいる。学校に通っていても、保護者の理解が得られず、やめてしまう子もいると聞いた。保護者の世代が、十分な教育を受けておらず、教育の重要性が浸透していないことが根底にあった。学校では、約 30 年前のポルポト政治について深くは教えないと言っていた。それは政府が止めているようにも思えた。深い悲しみのある歴史を繰り返さないためにも、教育の現場で語り継がれるべきことだと思う。

このツアーを通して、本当の豊かさとは何か考えた。今までは、経済や教育、医療、産業が発展しており、客観的に見て、裕福だと思うことだと考えていた。客観的に豊かさを判断するのではなく、各個人が豊かさを決めるということだ。日本から見て、カンボジアの農村は、貧しいと考えるかもしれない。しかし、現地の人々は自給自足の生活を送り、生活に不自由はしていない。一方的には豊かさを判断できないと思った。

最後に、引率の方、JAPF スタッフの方、貴重な経験をさせていただきありがとうございました。

## 【笑顔の大切さ】

広島工業大学 環境学部 2年生

私がこのインターンシップ型ツアーに参加しようと思ったきっかけは友人からの誘いだっただけだ。カンボジアについての知識はあまりなくて私にとってのカンボジアとは貧しい国であり、発展途上の国であった。私は、このなんとなくの気持ちで参加したツアーによって発展途上国とは？貧しいとは？と多くのことを考えさせられるきっかけになった。

まず初めに訪れた国、ベトナム。ベトナムは高校の修学旅行で訪れたことがあるので2回目だった。2回目なのである程度町の様子は想像できるけれど、町の人たちのキラキラした笑顔や日本のことを良く思ってくれているのを知ったのは今回行ったツアーだった。目が合うとニコッと返してくれた。日本と比べると日本では知らない人とは顔も合わせることがないし、ニコッと笑顔を見せ合うこともない。人間的に貧しいのは日本ではないかとディスカッションで結論づいた。その時点で貧しいとは経済的なものだけではないのだと気付かされた。カンボジアでも味の素などと言って挨拶してくれたり、笑顔でニコッとしてくれたりフレンドリーっていいなど実感させられた。訪れた場所によっては大きな声で話してはいけない場所もあった。知らなかったポルポト政権の過去や、その過去を残した場所には衝撃を受けた。

国々が悲惨な過去を乗り越えて、自分たちの国を作り上げている姿には私たちが何かしらできることはないかと考えたところ、ゴミ山についての問題が挙がった。具体的に言うと、ごみ処理場を作り、ごみを捨てたりリサイクルしたりそのようなサイクルをつくってあげることでいいのだ。大学生の私たちに、そのような大規模な事はそう簡単に出来る訳ではないけれど、呼びかけることなら簡単だと思った。私たちに出来ることとはと上から目線になりがちだけど、協力しながら得られることも多いはずだ。

クロサートメイ孤児院に訪れた際、子供に対しての接し方や子供の権利を守るために注意を払うことを頭に入れていてどうやって子供に接したらいいかと硬くなっていた。私が最初にコミュニケーションをとったのは話すことが出来ない子供だった。しかし、会話が出来なくとも、笑顔でニコッとすると、彼も私にハニカム笑顔を見せてくれた。そこで、笑顔は世界共通なのだと気付かされた。私は孤児院でたくさんの元気や、笑顔をいただいた。とても良い経験だったし、もっとカンボジアについて考えてみたいと思った瞬間だった。

豊かな国とは先進国だと最初は思っていたけれど、実際に訪れてみると豊かな国とはお互い支えあって協力しあっている国だと思った。憶測になるが、経済的に貧しかったとしてもそこに笑顔があるなら彼らにとっては幸せであるに違いない。言葉が通じなくても笑顔をみせることでその場は和むし、笑顔は世界をつなぐ橋になるのではないかと私はこの研修を通して感じた。

## 【目で見たカンボジア】

九州大学 法学部 2年生

今回のカンボジア研修で数えきれないほどのことを発見し、衝撃を受け、感動した。また訪問先だけでなく、ディスカッションを通してたくさん考えさせられることもあった。その中でも特に自分の中に引っかかったものが「基準」と「矛盾」である。これは単なるキーワードに過ぎないため、内容を深く掘り下げて述べていく。

## ・「基準」

それぞれの訪問先で考えさせられたのがこの「基準」についてである。特に教育や医療における整備の充実さとは何か基準を設けて考えるべきなのか。

教育面ではポルポト政権が根深くかかわっており、簡単に解決できることではない。比較的教育的場が設けられている日本で教育を受けた者としては、その内容の善悪にかかわらず歴史的な事実をきちんと伝えなければならないのではと考える。しかし、カンボジア国内では再びポルポト政権のときのような思想が生まれないためにも事実を子供に教えるはいけないという考えを持っている。

次に医療面については、医師自身に十分な教育が受けられていないことによる医師への信頼不足が原因で医療に満足していない人が多くいるという現状がある。アキ・ラーさんも毎年日本の病院で検診を受けているそうなのでもしかしたらその一人かもしれない。その一方で、HIV病棟にいらっしやっった患者の一人は、食事も出て薬も無料なため、今の入院生活で不便に感じたことはないとのことだった。しかし日本と比較してしまうと、やはり設備の充実さ、衛生面においてはまだまだ発展途上の部分が多くみられるのではないかと。

どこに基準を設けるかによって、整備の充実度がかなり変わってしまうことがわかる。しかしその基準に正誤をつけることが必ずしもいいことではない。だからこそ、先進国と発展途上国との差を解消することは簡単なことではない。

## ・「矛盾」

この「矛盾」は具体的には観光についてである。カンボジアの観光省を訪問した際に感じたことだった。観光省でのプレゼンで遺跡や食文化はもちろん、ビーチやエコツーリズムなどの分野にも力を入れていて、正直なところ、本当にカンボジアなのかと思ってしまったところもあった。確かにこちらで頂いたカンボジアの公式ガイドブックにはそのような記述や絵があり、おそらく誰もが行ってみたいと思うほど魅力的に感じた。しかし、後日訪れたゴミ山では衝撃を受けた。町などから運ばれたごみが山積みされており、何重にマスクをしても異臭が鼻にささった。そのごみの中には観光客が捨てたであろうお菓子の袋やペットボトル、レストランなどで出た残飯があり、ゴミ山の一部がカンボジア国外から訪れた人々によって形成されているという事実を突きつけられたことにショックを隠せなかった。私がこの研修でゴミ山について知り、何か解決できることはないかと考えていたのにも関わらず、自分たちがいることでゴミを出し

て結果的に町を汚し、カンボジアに住んでいる人々の生活空間を汚していたのである。もちろんゴミの焼却設備を整える必要があることも今後の課題であるが、果たして今後観光が発展したからといってカンボジア全体がより良い国として評価することはできるのか疑問に思う。

以上を踏まえて、自分が持っている価値観でさまざまな基準を作っていることに気づき、また自分が本当に支援したいと思っていることが実はそこに住んでいる人々に迷惑をかけているかもしれないことを目で見えて感じて学んだ。これらの問題は一つの答えにたどり着かないからこそ私たち人間が持っている思考というものを活用して、一つの価値観にとらわれず、さまざまな視野から物事を考えていかなければならないし、これを継続していくことも大切だと考える。

最後になるが、偶然にも部活のオフと重なり、この研修に参加できたことに運命を感じている。訪問先、ディスカッション、移動中の仲間との会話の中で自分になかった思考や事実をたくさん知ることができた。この8日間で得られたすべての出来事、そしてたまたまこの研修で一緒になった仲間、引率・ガイドの方々、子供たちなどここで出会えたすべての人たちとのかかわりは私にとって何にもかえられない大きな財産となった。本当に感謝しかない。

## 【想像力を媒介とした社会形成について】

同志社大学 文学部 4 年生

私は JAPF 主催のインターンシップ型スタディツアーに参加し、異文化交流の根底としての想像力の重要性を実感した。ベトナムとカンボジアの二か国を巡る今回のツアーでは、平和、医療、文化、社会、経済そして教育という六つのキーワードに基づき、カンボジア王国観光省や国際協力機構（JICA）といった政府機関から NGO、現地企業や教育、医療機関そして文化財、文化施設といった多岐にわたる研修先を訪問した。そして、それぞれの研修先で学んだことや現状の課題を研修中の毎晩、参加者同士で議論して、価値観や問題意識を共有した。その研修先の多様さから、集まった参加者の専門分野も教育学や看護学、社会学などバラエティに富み、私は彼らとのディスカッションを通して自分とは異なる専門を持つ大学生がどのような価値観と意識をもって日々を生き、いかにして日本及び国際社会に貢献しようとしているのかを知ることができた。その際、私は美術史という自分の専門分野について、芸術が現代社会に貢献することができると思ったら、それは芸術体験に伴う想像力の養成というかたちをとるだろうと考えた。

冷戦の終結により共産主義と資本主義という二項対立的な構図が崩れ、アメリカ合衆国のヘゲモニーが揺らぎつつある二十一世紀の現代社会は多様化、複雑化した様相を呈している。インターネットの普及により情報が瞬時に世界中を行き交う高度な情報社会となり、また交通網の整備により国外への渡航が以前よりも身近なものとなっている。このような社会では人々が自分とは異なる価値観に触れる機会が増え、難民問題のようにそれが摩擦を生む場合もある。

美学者、美術史家の三木順子氏はこのような現代社会において、自己の直接的な体験の限界を超えて、他者の思いに触れ、それを自己の内部に取り入れて共感することの重要性が増していることを指摘する<sup>1</sup>。その際に重要な役割を果たすのが想像力で、三木氏は本来、異文化交流は「成熟した想像力<sup>2</sup>」に基づく他者理解のうえに成り立つ営みであるべきだと述べる。ベトナム戦争やカンボジア内戦といった直接の体験者が減りつつある負の歴史の伝承とその記憶の共有は直近の課題である。日本人の私たちからすればこれらの悲惨な事実は外国での出来事だと感じられるかもしれないが、ベトナム戦争においては日本と軍事同盟を結ぶアメリカ合衆国が当事者であり、カンボジア内戦の場合でもその背景には「大国」たちの利権が絡んでおり、決して他人事ではなく、日本にも同じような出来事が起こる可能性はある。

こうした悲劇の連鎖に対して、芸術は想像力による追体験という抑止力を持つ。芸術は日常生活とは異なる論理に基づき、その芸術に特有の世界観を持っている。芸術は日常とは異なる論理で成り立つがゆえに、日常生活で見落とされがちなものを鑑賞者に現前化させる。今回、訪問し

<sup>1</sup> 三木順子「芸術における周縁的なものと人間の生—『限界芸術』の概念を手がかりに一」『カルチャー・ミックス 文化交換の美学序説』岡林洋、晃洋書房、2014 年。201-201 頁を参照。

<sup>2</sup> 同前、202 頁、1 行目より引用。

たホーチミンの戦争証跡博物館では、現在の町の活気からは想像のできない辛い過去を写真という形式で、想像力の媒介を通して鑑賞者に伝える。日常とは異なる可能性を人々が想像力の助けを受けて疑似的に体験し、共有することで平穏な日常の価値を再認識し、その継承に努めることができる。日本でも平和大使として活動するドクさんがおっしゃっていた、「戦争をすべきでない理由は、平和の中で考えろ」。に通じる部分である。

社会的に大した影響力のない大学生の私は、今回のスタディツアーでホーチミンのツーザー病院平和村やプノンペンの子院など様々な研修先を訪問して、自分そして受け入れ先にとってこの訪問は何の価値があるのだろうかと何度も自問し、無力感を抱いた。しかしいま思えば、直接、足を運んで見て聞いて、現状を体験することに意味があるのだろう。それらは、芸術体験と同様、私たちの想像力を鍛え育てる。

私は芸術が想像力を媒介に、ひととひと、そしてひとと社会をつなぐ力があると信じているため、将来的には芸術を通して異文化や「他者」に寛容な多様性のある社会を実現するつもりである。私が文化行政の職に就くとき、もし今回のツアーの仲間たちが同じような志をもって「豊かな」社会の実現に努めているならば、ぜひ協力して事業を推進できることを願っている。今回のツアーの財産は、ベトナムとカンボジアでの直接の体験と、なにより似た志を持つ仲間に出会えたことである。

#### 【参考文献】

三木順子「芸術における周縁的なものと人間の生—『限界芸術』の概念を手がかりに—」『カルチャー・ミックス 文化交換の美学序説』岡林洋、晃洋書房、2014年、187-205頁。

## 【考え方の変化】

名古屋市立大学 人文社会学部 1年生

これまで私は日本の外に出たことがなかった。海外の情勢を実際に目にする事で自分の知らない世界について何か分かるのではないかと思い、このツアーへの参加を決めた。しかし実際12日間を異国で過ごし様々な物事を目にする事で、結論が出ず考えさせられ続けることの方が多かった。本稿では、ツアーを通して生じた、自分の考え方の変化を2つまとめる。

1つ目は、「何が正しいか」ではなく「何を信じるか」に重きを置くようになったことである。ツアーに参加する前は、JICA や NGO 団体などを訪問することで、いわゆる支援においてどのようなことが必要なのか「普遍的」な答えがわかると思っていた。しかし実際は何が正しいのか、あるいは何をすべきなのか分からなくなるばかりであった。CIESF や JHP といった NGO、一企業である KURATA pepper などを訪れたことで、それぞれが全く異なるアプローチを行なっていることを知った。また、王宮前の子供達から商品を買うかについて、買う・買わないという相反する二極であるが、どちらの立場の人にもそれぞれの考え方があり、どちらが間違っている訳でもないと学んだ。それぞれがそれぞれの意思で活動を行なっている。それは「普遍性」を見出すにはあまりにも多様すぎた。物乞いの子供達のことのように、相反する「正しさ」があることも痛感した。

そして、「自分が何を信じるか」に考え方の重点が移っていった。トップダウンを優先する団体やボトムアップを優先する団体、今を重視する考え方と未来を重視する考え方、どちらも正しい。物乞いに答えるのも答えないのも間違っていない。しかし、選択しなければ行動に移せない。そこで見出された一つの答えが「自分が何を信じるか」であった。当たり前のことかもしれないが、行動の軸になるのはこの「信念」であると12日間で強く感じられた。

2つめは、過去に対して以前より肯定的に捉えるようになったということである。平和村や HIV 病棟で暮らしている人々に会うべきだったのかという議論があった。王宮から帰ってきてからのディスカッションが犯人探しみたいになってしまったのではないかという意見があった。当然今後似たような状況に置かれたときを想定しどうすべきか考える必要はあるが、これらの経験ができたことに価値を見出している。確かに、HIV 病棟に行かない方がよかったのかもしれないし、王宮後のディスカッションも他にいい方法があったのかもしれない。しかしそのような思いも含め、病棟に行く、子どもから商品を買う、ディスカッションを行うといった行動があったからこそ、こうして様々なことを考えることができたと思える。

過去の肯定は今後の行動にポジティブな影響を与えると考えられる。過去を肯定できるという自信が、行動の積極性を生むからだ。それゆえ、この考え方の変化は私にとって非常に大きいものであった。

以上の二つの変化が、私がこのツアーで得たとりわけ大きな収穫である。このツアーに参加できたこと、引率含め語り合える素敵な仲間に出会えたこと、この12日間に関わった全ての人に感謝したい。



## 【ベトナム・カンボジアに行く】

大阪教育大学 教育学部 3年生

私がこのツアーに参加しようと思ったのは、ほんの小さなことがきっかけだった。今まで海外行ったことがなく、海外に行ってみたいなとぼんやり思っていた私は、学校でふとこのツアーのポスターを見かけて、英語がいない、手厚そう、ほかの学生もいるから楽しそうだという軽い気持ちで参加した。その時はまだ、このツアーが私にとってこんなにも実りのあるものになるとは思ってしなかった。

まず海外の地に降り立つとむあつとした暑さを感じた。カンボジアでは、街中に大きなビルやイオンなどがあって、自分が想像していたよりずっと発展しているなど感じた。その一方で道路歩いてみると日本よりも多くのゴミがそこらじゅうにポイ捨てされていて、息を吸い込むと少し臭い。日本との違いを全身で感じた瞬間だった。

街中の様子をはじめとして、様々な研修先で日本との違いをひしひしと感じた。その中でも私の中でとくに印象に残っているのが、HIVの病棟を見学した時である。HIV病棟では患者の様子を見学させていただくことができた。患者の様子を見て愕然とした。患者の付き添いの方がガイドさんを通じて患者の方の生活、症状などについて説明をしてくれていたが、正直私は全然頭に入らなかった。解説をしてくれている付き添いの方の奥で、ベッドに力なく横たわり、寝たきりの生活を送っている患者がいる。目は開いているが、私たちが来ても反応を示さず、かといって付き添いを見るでもなく、天井なのかもしれない我々の後ろの壁なのかどこともいえないどこか一点を虚ろに見つめていた。質問も許可されていたが、一体なにを質問したらいいのか。横たわる患者をみて、あの目で何を見てるんだろう、何を考えて日々生きているんだろうと悶々としてしまった。病院の先生がカンボジアでのエイズの現状、原因について話してくれているときも、ここにいる患者はどうして日本に生まれなかったのだろうか、もし日本に生まれていたら寝たきりになる前になんとかかなったかもしれないのにと考えても答えの出ないことばかり頭の中を巡って涙が出てきた。ただただ現実が悲しかった。

病棟のあとの日本語学校では打って変わって、子どもたちがキラキラとした目をしていて、我々日本人を期待の眼差しで見ている。バスで30分程度の距離なのにこんなにも違うのかと二面性、ギャップにまたショックを受けた。

悲しいとも思ったが、実際に行かなければ分からなかったことで、知れてとても価値があったと思う。これ以外にも実際にみて想像と違ったものや、知らなかったものがあり、このツアーに参加する前と後ではものの見方が変わった別の人間になっていた。それらを踏まえてこれからどういう将来を歩むのかはわからないが、自分が見たこと、聞いたことを日本で伝えたいと思った。

## 【必要な支援とは】

文教大学 国際学部 2 年生

私は発展途上国および貧困国に対して、自分に何ができて、今一番必要な支援は何かを考えて実行するためにこのスタディツアーに参加した。しかし、ツアーで色々の場所を訪れるほど、自分が考えていた支援は何も変えることのできない小さなものであると考えてしまった。自分が貧困地の人々に、出来ることをよりも、出来ないことの方が多くて、無力感をたくさん感じた。

そもそも、貧困とは何か。今回のツアーで訪問した SUI-JHO の浅野さんが「カンボジアは、貧困じゃない」とはっきり言われたとき、混乱してしまった。確かに都市部の町はきれいだし、裕福そうな人もいた。ただ、農村のような、都市部から少し離れた場所では、見える景色も全然違った。靴も履かずに、着ている服もボロボロな状態で、学校で教育も受けずに働き、生きるためにゴミを漁る子供たちを目の当たりにして、貧困じゃないとはとても思えなかった。その人たちが最低限の生活をして、しっかりした学校教育を受け、衛生的にもっと安全に過ごすための支援をしたいと思った。だが、すべてを一気に行うのは不可能である。一つずつ、順番に解決していくしかない。その中で、個人的に一番に変えなければいけないと思ったことは、教育面について。

このツアーを参加する前から、教育を受けることにより、貧困問題が解消されると考えていた。だからこのような子供たちに学校で教育を受けさせなければならぬと思った。カンボジアで学校を作っている財団の話聞き、支援のやり方の違いにも考えさせられた。CIESF のようなトップダウンの支援をするか、JHP 学校を作る会のようなボトムアップの支援をするかをツアーの仲間たちと議論しあっていた。カンボジアに関しては、教育制度が備わっていないことが問題だと考えた。ボトムアップは多くの人に教育をする設備を整えてくれるが、上記の点が解決されない。一方、トップダウンはこの問題は解決してくれる。ただ、即効性がなく、時間がかかる。人数も限られていることから、別の問題が発生してしまう。国を変えるために優秀な人材を作るためには、トップダウンの支援が必要である。しかし、それをすることにより、格差は広まる一方であるということも事実である。どちらも同時進行で行わないとうまくいかないことが分かった。

今回のツアーでは、はっきりしない答えが多く、一番必要な支援が何なのかがわからなかった。しかし、貧困の定義を考え、どうすれば生活が改善していくかを考えたことにより、今まで物事をアバウトにしか考えられなかった自分は、現地の人々が何を求めているかを考えることができるようになった。相手が必要だと思うものと考え、自己満足で終わらない支援ができるよう、これからも考えていこうと思った。

## 【現地で感じた本当の支援の在り方を考える難しさ】

茨城大学 人文社会科学部 1年生

初めに、JAPF 2カ国研修ベトナム・カンボジアインターンシップに参加して、大変お世話になった引率のお二人、ガイドの方、素晴らしい仲間たちに心からの感謝を述べたい。そして、このツアーを企画運営して下さった JAPF の皆さま、学生団体の皆さま、また後援の領事館や大使館の方々をはじめ、我々の訪問を受け入れて下さった研修先の方など、このツアーに携わるすべての方へ謹んで感謝を申し上げたい。

私は今回の 12 日間のインターンシップを通して平和、医療、教育、産業、文化、社会の 6 分野の研修や参加した仲間とのディスカッションから、国際協力や途上国の発展について多くの知見を得ることができたと同時に、「行って」見ないとわからない現地の人々の考えと生き様にふれ、様々な感情や気づきを得ることができたと思う。

私は、ツアーの中の議論で、「草の根の支援とトップダウン型の改革はどちらが重要か」という論題が最も強く印象に残った。これに対して私は、草の根的な支援も政府レベルの上層からの改革もどちらも現在のカンボジアには必要であり、支援や国際協力の過程でこれらの各段階はより連携して支援や取り組みを行うべきだと考える。

なぜなら、今回のインターンシップで様々な現地の人々の暮らしを見、研修先の方々や参加者の仲間など様々な人の意見を聞き考える中で、明日生きていくための支援を本当に必要としている人が存在する一方で、「今」の支援だけでは長期的には生活を本当に豊かにすることはできないのではないかということに気付いたからだ。

一つ忘れられない出来事がある。ツアー5日目の夕方、カンボジア王宮前を訪れたときのこと、一人の10歳くらいの男の子が私のところに近づいてきた。薄汚れた学校の制服と思しき白いシャツと黒い長ズボンを着た彼は、観光客を相手にゾウの柄のペンケースを売っていた。1つ2ドルで買ってほしいという。私は、そのペンケースを4つ購入した。この夜、ストリートで物を売る子供から何かを買うことは良いことか否かという議論がなされた。賛否両論様々な意見が出されたが、長期的にみるとこのような観光客がい続ける限り、ストリートで物を売る子供たちは減らないという意見があった。しかし、本当にそうだろうか。「草の根」レベルで私たち観光客一人ひとりが彼らから物を買わなくなったとしても、「トップダウン」的な教育レベルや雇用の拡大がなければ、結局その日その日を暮らす人はその生活を続けることになると思う。

本当の支援を考えたとき、本当にその人のためになることにつながる私たちの行動は、正解がないのかもしれない。実際あの時私が彼に払った8ドルがどのように使われたのかわからない。

カンボジアに貢献したい、苦しんでいる人の助けになりたい。そんな思いがあってもいざ現地に行ってみると、誰が困っているのか、それは本当に「困って」いるのか、自分はどう行動すべきなのか、わからないことだらけだった。自分の無知と無力さを実感した。今後もこの貴重な12日の体験を糧に、勉学に励み、将来は何らかの形で国際社会で働ける大人になりたい。

## 【過去に習う——高校時代の思考を巡らせて】

明治大学 理工学部 4 年生

私は、高校生の時に差別についての作文を書いた。その内容は、差別というものを知らなければいじめや差別は起こらないと考え、差別を習わなくてもいいのではないかというものだった。今回の研修でも両国のツアーガイドさんは、悲惨な過去を伝えない方がいいとおっしゃっていた。当時の担任からのコメントは、私の作文を否定するものであった。一見、差別をなくす解決策に見えるが、知らなければならぬことだと書かれていた。このコメントを見て、当時の私はどちらがいいのか分からなくなった。もちろん、この研修が始まるまで分からなかった、むしろこの迷いすら忘れていた。しかし、この研修旅行を通して迷いが晴れたので、そのことについて書く。

ベトナムではベトさんが、戦争があってはならないことを伝えてほしいと強くおっしゃっていた。また、カンボジアでは地雷撤去活動をされているアキラさんも話せるのであればもっとポルポト政権時のことを話したいとおっしゃっていた。さらには、この研修で訪れた様々な施設は、戦争や虐殺といった悲惨な歴史を綴るものであり、このツアーも全ての日程がそうではないがそれらの歴史を伝えるためのものである。多くの人を知る事・伝える事・綴る事が大事だと考えているように思える。マジョリティの意見が必ずしも正しいとは思わなが、皆がそう思うのはなぜなのかを考えてみた。それは、過去に学ぶしか未来を変えることはできないからだと思った。この話は、少し話が逸れてしまうが、スティーブジョブスは、何が何につながるかは未来にならないとわからないと言っている。すなわち、「何」が過去のものになってはじめて他の「何」とつながるのだ。これらのことから私は、過去に学んだり過去を振り返ることで未来に繋げていかなければならないと思った。悲惨な歴史を伝えないとなると、一部の過去に蓋をしてしまうことになる。そうなっては、過去より良い未来を築くことはできない。

最後に、ベトナムの若者があまりベトナム戦争のことを知らないからこそベトナム戦争のイメージが薄れ、安全でカラフルで女子旅の定番地になるような国というイメージが付き、発展しやすい国へと変わったという見方について触れておく。私もベトナム共和国が戦争のイメージが根強いままではいけないと思う。しかし、歴史を知らないのと戦争のイメージが色濃く残ることは別の話だ。戦争はあったが、今では発展しつつあるいい国だと思えるように、どちらのベトナムも知っていなければならないと思う。なぜなら、ベトナムは未だに地雷が埋まっている地域があったり教育やインフラの面で国際協力を必要としている国であるから、過去を知らないベトナムの若者が増えても根本解決・根本支援にはならないと思う。ベトナムはベトナム人がよりよくしていかなければ国は簡単に崩れてしまうのではないかと考える。これは、今回の研修旅行中にもカンボジアに対して言われていた議論と同じである。ただ、1つ付け加えておくと、各国は各国民が作っていかなければならないと言うと、外国人はその国でビジネスをしてはいけないような感じがする。私は生粋の日本人であるがいつかカンボジアで生計を立てたいと思って



いる。それはカンボジアのゆるさや人柄がとても気に入っているからだ。何が本当の国際協力になるかは分からないが、自分のやりたいことに素直に従うことも大切だと本研修から学んだ。

## 【ツアーを通して、みんなと出会って】

岩手大学 人文社会科学部 1 年生

私は、「(国際) 支援は上から目線であってはいけない」とツアーに参加する前から認識はしていた、つもりだ。本来、第三者が (エゴで) 干渉するべきでない。「それでは、支援というのは無い方が良いのか」と思ったり、「でも、困ったり苦しんでいる人、地域を見過ごすことはできないだろう」と思ったりしていた。支援の在り方に、自分なりの結論を出せたらと頭の片隅で思っていて、ツアーに臨んだ。

そしたら、その自分の問いを想起させる機会が、想像以上にあった。研修先で活動する方のお話、そしてみんなとのディスカッションの時等である。例を挙げる。

折角作った井戸が、その水にヒ素が含まれていて、結局使われなかったことがあったそうだ。CIESF の「自分達がしたいことでなく、途上国が欲しい支援をする」という姿勢を参考にすると、井戸の例は、自分達のしたいことを支援する側が強行したとも言えるだろう。また、先進国の新しい価値観が現地に浸透することで、それまでは幸せだと感じていた人々が「自分達は貧しいのか」と意識するようになり、新たに支援が必要になることも考えられるということも知った。

そして最終ディスカッションのテーマが、「カンボジアでどんな国際協力をするか」であった。まさしく支援・協力の在り方を考える機会となった。各班の考え、どれも参考になるものばかりであったが、自分の班の結論について述べる。まず「支援」でなく「協力」としたテーマ設定の意味の深さ、それに気づくことができるメンバーが改めてすごいと思う。理想は、対等な立場でのお互いの協力であり、支援ではない。また、「支援」も長い眼で見れば、「協力」と捉えることもできる。そして、支援・協力は対象国の自立を目指すものでなくてはならない。では、支援は対象国が完全に自立するまで行われるのが良いのか、まだ自立しないうちに打ち切られても良いのかという疑問を私は抱いた。この疑問に私の班では、「二段階支援」という考えでもって答えが出た。対象国がある程度成長し、まだ自立はしないにしろ、自立の目途が立ったら、支援する側は単なるアドバイザーとして直接の手助けはしないが、対象国を見守る段階に入れば良いという考えだ。もし対象国の自立が難しいとなったら、また手を差し伸べれば良い。干渉しすぎず、かつ完全に見放すわけでもない (支援を打ち切らない)、とても良い支援の在り方だと思った。少しもやが晴れたような気がする。

支援の在り方以外にも、たくさんの事実に触れ、考えさせられた。JAPF でないとなかなか行けない研修先からはもちろん、周りのみんなから学び、感じるどころが多々あった。夜遅くまで現実の問題等を熱く話し合ったディスカッションは、とても楽しかった。同時に、みんなの議論の進め方等、能力の高さに圧倒され、自分のレベルの低さが悔しかった。人として、自分に足りないところがたくさん見えた気がする。

みんなが頑張ってきた、頑張っていることを忘れず、置いて行かれないよう挑戦、自己研鑽し続けていこうと決心するに至るツアーとなった。

## 【初めての海外で感じたこと】

常葉大学 教育学部 2年生

自分にとって最初の海外は観光ではなく、勉強をしに行きたいという意思がなぜかあった。理由は本当によくわからないが海外を何か軽くとらえたくなかった気がする。そんな中このスタディーツアーのポスターを見てこれしかないと思った。少し敷居が高そうだったので大丈夫かと不安になったがスタッフの方が熱心に背中を押してくれたので参加を決めた。

そして当日になり初めて海外の地に降りた瞬間、すごい胸が高鳴った。空気が違い、空も街並みも全部が新鮮でうれしかった。そんな気分のもと、戦争証跡博物館に行った。今まで海外の戦争事情はまったく知らず、あまり関係のないものだと思っていたが、写真や実物を見ると同じ人間なのだと実感がわいてきた。この場でもう一つ感じたことは海外の観光客が多く来場していたこと。ここに来ていた多くの国の様々な人達の様に自分の国のことじゃなくても関心を持っている姿は見習いたいと思った。次の日に平和村に行って先天性の生涯を持った子供たちと会ったとき「自分どうすればいいのだろう」という思いに駆られた。何もできないでいると地元の子供たちが獅子舞を披露しにやってきた。子供たちが精一杯演技して、それをみた平和村の子供たちは嬉しそうで、その嬉しそうな顔をみた子供たちはまた嬉しそうで、すごい心が熱くなる景色がみれた。世界のいろいろな事情とかあるのだと思うけど本当は至極単純なのだった。難しいことはやらなくていいし、ただ喜ばせることができればどちらも幸せなんだと感じた。

そしてベトナムで三日間過ごしたあとカンボジアに移動した。カンボジアですごく印象に残ったのは王宮前での出来事。自分は何も知らないまま過ごしたあと、ホテルに戻ってから「押し売りの子供たちのものを買っていいのか」という議論になった。いろいろ考えて王宮前を見ていた人からすると自分の行動はすごい軽率だったのかもしれない。買わないのが正しいのか買うのが正しいのか自分は今でもはっきりわからないが、何も知らないというのは怖いことだと思った。そして自分にとって一番いい思い出になったのは孤児院や農村で子供たちと一緒に大好きなサッカーをやれたことだ。言葉が通じなくても、時間を忘れるくらい夢中になって楽しめた。全く違う場所で生まれ育った人同士でも何も違いはなかった。

今回の初めての海外で一番感じたことは、海外とか外人とか聞いて何か自分と違ったり、遠い位置にいる人だと思っていたが、国や言語とか顔つきが違っても同じ「1人間」でありずっと近くにいる存在なんだと思った。もっと世界が身近になるよう、自分の世界を更に広げていきたいと思った。そしてこのツアーで出会えた人たちは本当に自分にとって大きな財産となった。このすごい人たちに負けないよう自分も芯をもって何か成し遂げていきたい。

## 【正解のない世界】

宮崎公立大学 人文学部 1 年生

たくさんのことを学び、何が正しいのか、何が良いのかを考えるのがとても大変な 12 日間だった。知らなかったことを知り、幾度となく悲しくやるせない気持ちになった。それでもこんなに新しいことを知るのが楽しく、毎日が充実していると感じたのは初めての経験だった。異なる大学で異なることを学ぶ参加学生と様々な議題で意見交換できたことがとても勉強になったと思う。一日中研修先を回って疲れていてもディスカッションの時間が楽しくて仕方がなかった。ディスカッション以外の時間でも暇さえあればずっと話し合いばかりしていた。人の意見を聞くことがこんなにも楽しいことだと初めて思った。そんな私の中で最も大きかったのは王宮の前の広場で感じたことを話し合った時間だ。王宮の前で強引な物売りをする男の子たちを私は冷たくあしらった。そこで私が彼らの商品を買うことが正しいことだと思えなかったからだ。彼らのためにもならないと思った。商品を買っている人を横目に、ずっと心苦しくて早くその場から逃げ出したいと思っていた。そんな気持ちをみんなの前で伝えたとき、自分の意見は非難されるのではないかととても怖かった。しかし、みんなの意見を聞いて、何が正しいのかではなくあの時それぞれが感じたことを共有することが大切なのだと気づいた。そして異なる意見を聞くことによって自分の考えが変わっていくのを感じた。私は、あの時強引な物売りをする男の子たちだと決めつけて、彼らが持っていた商品を見ようとしなかったのではないかと、そんな自分に気づくことができた瞬間だった。この時間のおかげで知っているがゆえに見えない部分があり、知らないがゆえに見える部分があるということを知った。また、私の意見を聞いて考えが変わったと言ってくれた人がいた。うれしく思うと同時に私の意見が与えた影響は本当に良かったのかと戸惑った。自分の意見に対してこのように思ったのは初めてだった。今回の研修を通して、物事に対してそれぞれの意見を共有して多角的に考えることが大事であると感じた。以前は、人と意見交換をしても反対意見や自分と違う意見をすんなりと受け入れることが苦手だった。それが様々な研修先でそれぞれの活動内容や目標を聞いて違いについて考え、みんなと毎日ディスカッションをする中で受け入れることができるように変わったと思う。

12 日間という短い間だったが普段の生活では絶対に出会うことのなかった仲間たちと出会い、本当に素晴らしい日々を送ることができた。たまたま見つけたポスターから始まった研修だったが、参加できたことを心から幸せだと思う。学ばないといけないことはまだまだたくさんあるし、みんなに負けないようにもっと頑張らなければいけない。この出会いを大切に今度は私が以前の私のようにチャンスを探している誰かにバトンをつなげたい。

本当に素敵な時間をありがとうございました。

## 【始まりの12日間】

宮崎大学 教育学部 2年生

私の参加のきっかけは先輩からの紹介だった。カンボジアやベトナムに興味があった訳でもなく、国際協力に興味があった訳でもない。ただ外国に行きたい、日本でないところに早く行ってみたい、という気持ちでしかいなかった。もう一つ理由をあげると、嫌いな「固定概念」や「思い込み」を壊してみたかったという気持ちがある。カンボジアと聞いて私が考えるイメージを壊したかった。真実のカンボジアを見てみたかった。

そうこうしていると何もかもが不安のままツアーが始まった。12日間の日々は一言で言うと刺激ある日々だった。ベトナム戦争の話やクチトンネルの視察、平和村での出会い、カンボジアの内戦の話、カンボジアで働く日本人の方の話、日本語を学ぶ学生、国際協力を行っている人の話、病気と向き合っている人々との関わり、王宮で物を売る子ども、孤児院、農村、トンレサップ湖での生活の様子、ゴミ山、アンコールワット。

実際に行ってみて、思っていたイメージはボロボロに崩された。それがとても嬉しかった。「真実を知ろうとしなければ真実は知ることはできない」ということを実感した。

ただ、私は現実を現実としてしか受け止められなかった。みんなのように『この人たちを救いたい、この人たちのために何か出来ることはないか?』と考えることはなかった。自分は冷たい人間なのかも知れないとも考えた。しかし、支援をして、助ける側はそのリスクも考えるべきであると思うし、人のためになりたいと思うことが同情からではいけないと思っていた。そんな思いを抱えながらツアーの最終日が近づいていた。モヤモヤしながら過ごしていたが思い切って打ち明けたところ、みんな考えてくれた。その話し合いで『誰かを幸せに出来たら自分も幸せ』という考え方を吸収した。仲間で話し合い、考え合ったからこそ私の中で新たな発見が出来た。

こうした深い学び合いができるディスカッションの時間は、体は疲れていながらも相手の考えを少しでも学ぼうと、自分の考えも理解して欲しいとお互い時間を惜しむことなく夜遅くまで話し込んだ。皆それぞれ全く違う環境で育ち学んできたからこそ色々な意見が出てきて、どの意見も尊敬できるものだった。すごく胸をざわつかせながら、楽しんで語ったことを思い出す。

ツアーの日々を終えてツアー前とツアー後で私の考え方が大きく変わったことはない。ただこの12日間は「始まりの12日間」だと思う。平和や他者理解や国際協力、語学、自己理解ももっと考えていきたいと思った。自分の好奇心に忠実になる。それがカッコいいということを出会った仲間に教わった。日本に帰ればバラバラの場所で頑張っているみんなの存在を感じながら私は私の場所で知りたいこと、考えたいことに向き合っていこうと思う。

ベトナム・カンボジアに行くことを選んで、参加者、引率、ガイドさん、現地の方に出会うことができ良かったと思う。この体験の自慢を友人にうんと話したいと思う。

## 【実際に行ってみないと分からないこと】

宮崎公立大学 人文学部 1 年生

私の将来の夢は国際協力をしている団体に入ること。中学生の頃から英語が好きで、英語の先生になりたいというのが夢だったが、高校生になって色々事情があり、英語教師になるという夢に憧れを抱かなくなった。それでも英語は好き、英語に関わる職に就きたい、そう思っていた時に見つけたのが国際協力だった。これという具体的な理由はないが、なぜか自然と魅かれた。しかし、夢はあっても何も行動できていなく、夢がただの夢のままでいた時、友人からこのツアーを紹介され、すぐに参加したいと思った。

それぞれベトナム、カンボジアに着いたとき、街の様子を見ただけで衝撃だった。私はこのツアーに参加するまで“発展途上国＝貧困”というイメージしかなかったからだ。両国共、都市部の街の賑わいや、外国人観光客が多いこと、幸せそうに笑っている現地の人々を生で見て、自分が本当に発展途上国に来ているのかと疑問に思うほど、驚きを隠せなかった。

ツアー初日に訪れたベトナムの戦争証跡博物館で感じたことは、自分が本当に“無知”であったこと。戦時中に撮られた生々しい写真や、枯葉剤の影響を受けた写真、実際に使われた道具など見るだけで当時の人々の苦しみや恐怖が痛いほど伝わった。今までは受験のためだけに短期記憶で覚えたベトナム戦争というただの単語だった。中身を全く知らない自分がものすごく恥ずかしく、これから訪れる研修先でもこのように感じることもあるだろうと思ったし、ベトナム、カンボジアで起こったことを知ったところで今の自分に何ができるのか分からなかったが、“今”知らないと自分はこのままずっと無知なままだし、知らないことの方が罪なのかもしれないと考え、これをきっかけにしっかり学んで自分がしたい本当の支援とは何なのか考えようと強く思った。

JICA、CIESF、JHP などカンボジアで支援をしている団体にもそれぞれの支援の形があることを学んだ。JHP さんのような草の根の支援、CIESF さんのような上に立つ支援。また、KURATA ペッパーの倉田さんが話していた、支援してあげたいではなく、共同で発展していくことという言葉も印象的だった。みんながそれぞれでできる国際協力をしている中で、自分ができることは何か、ツアー中考えても考えきれずまだ答えを出せていないが、直接話を聞いたことで大きな刺激を受け、支援に対する考えを広められた。

このツアーに参加したことで自分が知っていたつもりになっていたことを気づかされ、何より一番感じたことは“実際に行ってみないと分からない”ということ。百聞は一見に如かずとはこういうことかと感じさせられた。このツアーをきっかけとしてこれからも自分がしたい、できる支援とは何かしっかり考えながら夢に向かって頑張りたい。

最後に、JAPF の方々、引率のお二人、ガイドさん、一緒に過ごした仲間、応援してくれた母や友人など協力してくれた全ての人たちに感謝の気持ちでいっぱいです。本当にありがとうございました。

## 【ツアーを通して学んだこと】

北九州市立大学 外国語学部 1 年生

私は大学で国際関係を専攻しているが、大学では表面的にしか学ばないことも多いため、今回のツアーで、雇用を生むために起業された方や、JICA をはじめとした組織の方の活動を具体的に知ることができて非常に良かったと思う。たくさんの見学先を訪れて感じたのは、個人レベルでの活動と国際協力の難しさである。

まず、個人レベルでの活動の難しさについてである。孤児院や平和村やごみ山の子どもたちと会う中で、自分の無力さを痛感した。孤児院の方などは、私たちが子どもと遊んであげることが子どもたちにとってうれしいことだとおっしゃっていたが、本当にそうなのであろうか。私は孤児院にいた少年らと折り紙をして遊んだが、彼らはもうすでに折り紙の折り方をいくつか知っていた。小さい子は単純に遊ぶことを楽しんでいるようだったが、少し歳が上の子どもたちは控えめだった印象がある。本当は私たちにつきあって彼らが、遊んでくれていただけかもしれない。

また一方で、彼らに本当に私たちの手助けが必要なのであろうかという疑問も抱いた。確かに現実問題として、家がない、学校にいけないなどの解決されるべき問題はたくさんある。しかし、彼らは私たちの自己満足にも思える行動を静かに受け止めてくれるという点で、私たちよりはるかに大人であり、私たちからすると厳しい生活条件下においても、たくましく豊かに生きているのではないのだろうか。つい私たちは先進国で生まれ育ったという背景から、自分たちは何かできるだろうという考えを持ってしまいが、そんな背景は関係ないのだということを痛感した。

そして相手の立場に立って考えることの難しさも改めて感じた。私が孤児院で最初に話しかけた少年は、耳が聞こえず、話すことが困難な少年であった。また、平和村にいる子どもたちはなにかしらの障がいをもっていた。私はどう接したらよいのか分からなかった。人は未知のものごとに対しては、恐怖や不安を覚える。時間をかけてお互いのことを知る努力をすることが、人と接する上で最も大切なことだと感じた。

次に国際協力のありかたについてである。いくつかの団体をまわったり、ディスカッションを通して、最も重要だと考えたのは、現地の人とともにあることである。協力するときには需要を的確に把握する必要があるが、協力する側だけの価値観だけではそれは不可能である。また、国を内側から変える協力に関しても、現地の人自ら考えて創造しなければ、国としての独自性は保たれないだろう。

カンボジアでは多くの日本の団体が現状を変えるために日々活動している。カンボジアの人々にとって、学びや仕事のチャンスは確実に増加しているといえる。しかし、農村部と都市部などを比較すると、その経済格差は広がっている。やりたいことがあっても、支援してくれる団体があることを知らない人も多くいるだろう。中国は改革開放の際に、先豊論を基本としたが、結果として経済成長を遂げた現在でも、貧富の格差が広がっている。カンボジアが国際協力をうけて経済成長していく上で、この問題についても今後考えていかなければならないと強く思った。

## 【現地に行って感じたこと】

中央大学 文学部 1年生

今回自分がこのツアーに参加した目的の一つに、「データや文章だけではわからないものを、実際に現地に行くことで感じたい」ということがあった。抽象的な目標ではあったが、ある程度は達成できたのではないかと思っている。カンボジアの街並み、様々な施設、いろいろな人々の話や生活の様子など、様々なものに自分自身の感覚で直接触れることができたことは、カンボジアについての理解や発見、そして新たな疑問などといった多くのものを自分にもたらしてくれた。それらの中から、今回は二点に絞って書いていきたい。

一つ目は、現在のカンボジアにも少なからず影響を与えている、ポル・ポト政権及び彼らの行った政策についてだ。およそ4年間で200万前後の国民を虐殺していった彼らの所業は、教育や医療など様々な面で、今なお爪痕を残している。この事実だけを見れば、ポル・ポトは極悪非道な独裁者にしか見えず、実際ツアー序盤までの自分もそこで思考が止まっていた。しかし、だんだんと疑問がわいてきた。なぜそのような事態になる前に国民は声をあげなかったのか、なぜこのような危険人物が政権のトップに立てたのか、そもそもこのポル・ポトという人物は何者なのか、何を思ってこのような苛烈な政策を実行したのか。現地でいろいろな話を聞き、自分でも少し調べてみたところ、おぼろげながら、答えの一端が見えてきたように思う。ここでそれらを書き連ねるのは避けるが、一つ、強く印象に残ったのは、彼は彼なりの理想と正義のもとに行動していたように思えたことだ。彼の所業を肯定するつもりは決してないが、その裏には彼の境遇や思想、そして当時のカンボジアの対外関係や国内情勢など、様々な要因が関係している。彼の引き起こしたような凄惨な事態を繰り返させないようにするのは、カンボジアに限らず世界のどこでも考えなければならないことだが、そのためにはまず、元凶となった人物や事象について深く知る必要があるのだということを実感した。

二つ目は、ツアー中にも何度か言及されていた、価値観の多様性についてだ。それと大きく関わってくるものの一つが、カンボジアにおける社会問題(と我々が見なしているもの)だと思う。日本のような先進国、あるいは国際的な組織が、カンボジアのような途上国に何かしらの支援や提言をするというのは珍しくはないが、それは、こちら側の価値観を押し付けているだけのものも含まれているのではないかではないのかという考えが、ツアー中何度か頭をよぎった。例えば農村への教育支援についてだが、日々の暮らしに精いっぱいの人々に教育の重要性を伝えても、向こうにとっては余計なお世話としか映らないかもしれないし、教育がなくても何の不都合もないという人もいるかもしれない。もちろん教育支援がまったくの無駄だとは思っていない。子供たちが学ぶことに対してとても貪欲であるのは現地で実感したし、教育によって彼らの将来の選択肢が広がることは、彼らにとっても国にとってもプラスになるといえるのかもしれない。こういった支援などの問題に限らないが、自分たちとは違う文化圏の人々に接する際には、まずは相手やその背景も知らなくてはならないのだと感じた。相手の価値観にできるだけ歩み寄っ

たうえで、こちら側から見えるものも提示し、折り合いをつけていくことで、価値観や善意を押し付けるようなことを防がなくてはならないと思う。

結局二点とも抽象的なまとめとなってしまったが、このツアーでの経験を今後の行動に活かしていくのが、自分の課題だと思っている。考えなしの行動は問題だが、考えすぎて行動しなければ何も生まれない。そのあたりのバランスをうまくとっていければいいと思う。最後になるが、このツアーで同行したメンバーの皆さんや引率、ガイドの方々、ツアーの運営に携わってくださったスタッフの皆様、そして現地の方々に、このような貴重な経験をさせてもらったことについて、心から感謝申し上げます。

## 【カンボジアで学んだこと】

神戸市外国語大学 外国語学部 1年生

わたしは今回のカンボジアスタディツアーに参加して、日本にいたるだけは考えもしなかったことについて考える機会を得ることができた。

一つ目にカンボジアの現状についてだ。カンボジアは想像よりは発展していたが、同時に教育や医療分野で多くの課題を抱えていて、HIVの薬や孤児院建設の資金、地雷撤去の費用などをすべて他国に依存していることが驚きだった。これは、政府の関心がないわけではなく、課題が山積みで手が行き届いてないからだと思うが、ゴミの焼却炉がひとつもない一方で都市部には高層ビルが建ち並んでいるように経済の発展が先走りして、整備されるべき段階が飛ばされていると感じた。また、倉田さんのお話であった、校舎ができて先生がいない、井戸を掘っても有害物質が出て使えないというように良かれと思ってしたことが実際には問題の解決策になっていないということも衝撃だった。支援というとだれかのために何かを提供することと考えがちだが、本当の支援とは単に与えることではなくて、その国の地理や歴史、現状について十分な知識を蓄えた上で、必要なことを見極めて動くことだと思った。最終的には他国からの資金援助に頼ることなく、技術や仕組みを定着させることで発展していくことが望ましく、今後のカンボジアがどうなっていくかとても興味が湧いた。

二つ目に豊かさとは、幸せとは何かについてだ。日本はインフラも整備されているし、食も街も安心安全で何不自由ない生活ができている。一方で農村の衛生状態や生活環境は決していいものとは言えないけれど、そこに住む人びとは自給自足の生活をして、強く逞しく生きており、人間という一動物として生きる力をもっていて、とても刺激的だった。彼らには日本人にはない強さがあり、あるものを利用して満ち足りた生活をしていて幸せの形は十人十色だと思った。先進国からみるとカンボジアは遅れているように見えるけれど、孤児院や農村の子どもたちの人懐っこさと無邪気な笑顔がカンボジアの豊かさを物語っているように貧しいと不幸はイコールではないと感じた。日本には日本の、カンボジアにはカンボジアの豊かさがあり、わたしたちの基準で豊かさを判断せず、学びに貪欲な姿など素直にいいなと感じた部分を自分の生活にも取り入れていきたいと思った。

最後に、八日間本当に充実した時間を過ごすことができ、一生忘れられない経験になった。ツアー参加者、引率やガイドの方々、このツアーを通して出会ったすべての人に感謝の気持ちでいっぱいです。

## 【二か国研修で感じたこと】

専修大学 文学部 2年生

今回この研修に参加しようと思ったきっかけは学生生活をただ過ごしているだけではないかと感じてしまったからである。そこで見つけたのがこの研修であった。この研修に参加することによって今まで何もなかった自分を変えることができるのではないかと考えこの研修に参加した。またこの研修で感じたことが三つあった。

一つ目は豊かさについてである。この研修に参加して豊かさとは何か考えてしまった。確かに日本はカンボジアに比べて道路も整備されてトイレトペーパーも水に流すことができたりするなど環境面では日本の方が豊かであるのは間違いない。しかし人としてはカンボジアの方が豊かだと感じた。挨拶すれば挨拶してくれたり言葉は通じないけど親切で笑顔で話しかけてくれたりとにかく人が温かった。私はカンボジアの人たちのように心に豊かさのある人になりたいと感じた。

二つ目は自分も含めた日本はこのままでいいのか危機感を抱いてしまった。TAYAMA 日本語学校を訪れた時圧倒された。挨拶がすごくて日本でプレゼンをしたらあんな反応は返ってこないし何より学ぼうとする意識がすごかった。夜ご飯を一緒に食べた子は日本語で伝えようとしてくれていたし日本の方言も覚えようとしてとにかく学ぼうとする意識がすごかった。さらにその子は日本語のほか中国語も始めたと話していた。彼女の話聞いて尊敬するし今の自分ではいけない、変わらないといけないなと改めて感じさせてくれた瞬間だった。学ぼうとする努力をしないといけないと感じた。

最後は相手の気持ちを考えることだ。当たり前かもしれないがこの研修に参加して改めて感じたことである。この研修に参加した仲間にはいろいろな地域から色々な価値観、考えを持った人たちと出会った。理解するには相手の立場に立って考えないと理解できないと感じた。格差について話し合ったとき、みんな自分なりの考えがあって、自分たちから見たら貧しく見えるかもしれないがその人からすると幸せに感じていた。自分たちの価値観を相手に押し付けるから格差が生まれるのだと感じた。自分の価値観を押し付けるのではなくて相手はどう思っているのか寄り添いながら考えていきたいと感じた。そのつながるように私はこの研修では目配り気配りというテーマを持って挑んだ。困っていることしてほしいこと相手の気持ちになって考えながら行動することが大切なことだと改めて感じた。ちっぽけで団体も作れない自分にとって唯一できることが相手の立場に立って考えることしかできないと感じた。今回の研修のテーマである「本当の支援とは」について自分が今できることは相手の立場に立って寄り添い考えることしかできないと感じた。

12日間この研修に参加して一日一日が新鮮で考えさせられるものがあって色々な価値観を持った人たちの考えを聞いていい刺激になったし年齢関係なく尊敬できる人たちで自分も日本に帰ったらより努力しないといけないと感じた。やりたいことしてみたいことを恐れずにチャ



レンジしていきたいと感じさせてくれた研修だった。12日間無駄なことは何一つ無くすべて吸収して今後に活かしていきたい。本当にこの研修に参加できたことは今後の財産になると感じました。引率の方々、ガイドの方々そして一緒に参加した仲間たちに感謝の気持ちでいっぱいです。12日間お世話になりました。本当にありがとうございました。

## 【ツアーで学んだこと】

長崎県立大学 国際社会学部 1年生

このツアーを知ったきっかけは、学内の留学や外国語試験のポスターコーナーで見つけたことである。海外に憧れや興味はあったものの実際に行ったことはなく、また、大学生になって何かに参加したいと思っていた私は、すぐに参加すると決めた。

初海外で不安も多かったのですが、団体で行くことができるこのツアーは安心感があった。ツアーに行く前も、オリエンテーションや事前学習などが徹底されていた。

実際に参加し、「学ぶ」という言葉だけでは足りないほど、たくさんのものを得た。

まずは、一緒に参加した仲間である。様々な場所から集まった同世代のみんなと色んな会話できたことは、とても有意義であった。毎晩行われたディスカッションが特に効果的であったと考える。

そして、このツアーでなければ行くことのできなかった場所に行くことで得られた様々な経験である。特に私の印象に残った場所は、観光省である。その理由は、英語でプレゼンテーションが行われたことである。私は、大学入学の際に目標として「英語を話せるようになる」をあげていた。その目標を達成すべくこの一年努力してきて、実際に仕事で英語を使っている大人の話を理解することができたことは、私にとって自信となった。

また、今ツアーを語る上で欠かせないのは、体調不良である。今回私は、ツアー中に熱を出し、ホテルドクターにお世話になった。ホテルドクターの看護師さんは日本の方で、その方の活動のお話も、とても刺激的だった。そして今回体調を崩し、たくさんの人に支えていただいた。自分も、誰かを助けられる人になりたいと、改めて感じた。

帰国し、祖母にこのツアーの話をしたところ、泣くほどの衝撃を受けていた。それは、カンボジアでポルポトについての教育全く行われていないことに対してであった。祖母は、戦後日本の経験から、過去に事実を正しく知り反省し次に生かすために、教育が必要だと言っていた。私もそれに賛成である。「知る」ということは、すべての始まりとして、必要なことではないだろうか。

今ツアーに参加し、カンボジアに行き、自分の目で様々なものを見ることができた。私は今まで日本から発展途上国などを見て、「選択肢の少ない人生はおかしい」とずっと思っていたが、今回の経験を持ってそれは、より強固なものとなった。「貧乏に生きることを選ぶのは自由、でも、それしか選べない人生はおかしい」と、私は思う。世界中の人たちの選択肢を増やすために、私は今後どんなことをしていけばよいだろうか。この疑問を大切にして、これからの大学生活を過ごしていきたい。

最後に、今回のツアーに参加することで出会えたたくさんの友達、そして引率の方々。体調を崩したことでとても迷惑をかけてしまい本当に申し訳ない気持ちと、出会ってくれてありがとうという感謝の気持ちでいっぱいです。本当に、ありがとうございました。

## 【豊かさと幸福】

奈良教育大学 教育学部 3年生

アリストテレスは、「最高善とは、幸福である」と述べ、そしてその幸福の本質は「アレテー（＝魂の卓越性）」であると述べている。言い換えると、「よく生きる」ということである。そして、人間は幸福を求めるモノであるということも明確であり、これらは教育哲学の授業で学んだので、確実であろう。

どうして今、アリストテレスの名前を出したかという、最後のディスカッションの「豊かさとは何か？」という問いとまとめがずっと引っかかっているからである。確かに、豊かさというのは、心の豊かさという意味を含んでいて、カンボジアには笑顔があふれているかもしれない。しかし、豊かさや幸福について考えるときに、時間という視点を忘れてはならないと私は考えている。例えば「持続可能な開発」というのは近年ホットな話題であるが、ここにも時間という視点がある。今この瞬間の幸福を求めるのは簡単だが、長期的な目を見た幸せというのは考えるのは難しい。彼らの笑顔を見ると、カンボジアには、日本にはない本当の豊かさがあると思うかもしれない。しかしながら、豊かさの瞬間を切り取るだけで、本当に豊かかどうか判断するのは、少し早とちりである。私は、私を含めて、本当に豊かな人はいないと思う。もしお金持ちで、欲しいものがなんでも手に入っても、そういう人はまた新しいものが欲しくなるだろうし、あるいは、心がぽっかりかもしれない。また、経済発展のために環境破壊に加担するのも、豊かとはいえない。要するに、どの立場にあっても、人は欲求を満たそうと生きているのだろう。だからこそ、その欲求に生きがいを見出してほしい、と考えている。「生涯学習」というのもまた、ホットな話題である。現代的諸課題に対応するためという名目で始まったが、個人の欲求を満たす役割を担っており、さらには社会や地域課題へ対応するという役割も期待されている。生涯学習は学校で教えられるものではなく、誰から与えられるものでもなく、社会全体で作っていくものである。このように、生きがいを生み出していけるようになってほしいと考えている。

最後に、日本もカンボジアも、豊かでも幸福でもないやはり思う。ただ、日本は激しい人口減少により、経済成長も見込めず、暗い未来しか待っていないのは明らかである。カンボジアはその点で異なっていて、ほかの国の失敗をたくさん見てきたし、勢いも十分にある。戦前の日本のような皇民化政策は絶対にしてほしくないし、富める者だけが富む国にもなってほしくない。失敗をたくさん見てきたからこそ、歩むべき道は見えていると思う。本当の豊かさというのが何なのかは、いまだに分からないけれど、うまく発展することで、それが何なのか、見えてくるかもしれない。そして、『僕たちは世界を変えることができない』というタイトルが示すように、劇的には変えることはできないのかもしれない。しかし、私には伝えることができる。「みんなで」という視点をもてる子どもを育てることで、カンボジアの発展に微力ながら協力したいと思う。

## 【ツアーを通して学んだこと】

大阪教育大学 教育学部 2年生

このツアーに参加し様々なものを実際に見聞きしたことで、今までの自分の価値観が大きく変わることが何度もあった。一番の変化はカンボジアに対するイメージである。ツアーに参加する前のこの国のイメージと言うと、「貧困」「支援を必要とする国」であった。しかし、実際に現地に行って見た都市部の光景は、今までのイメージとは全く異なる発展しているものであった。カンボジアで起業された日本人のお話の中でも、カンボジアの急速な発展について言われていたが、どんどん変わりゆくこの国に対して今までのようなイメージを持ってはいけなさと感じた。たしかに農村部の方ではまだ発展が進んでおらず、インフラがきちんと整っていない場所は多く見られるが、私だけでなく多くの日本人がこの発展途上の農村部ばかりを見て、この大きく発展したカンボジアの部分について知らなかったであろうと思う。

さらに、「支援」とは必ずしも良いものではないのだと知った。私たちが貧しいと考えて一方的に与える支援は、その現地の人たちにとっては何も有益でない不必要なものであるかもしれないことがある。現地の人たちは今ある環境で満足に暮らしているのに、そこに不必要のものを与え、かえってその人たちを不幸にさせてしまうこともあるかもしれない。日本は経済的に見てカンボジアよりも豊かであるかもしれないが、精神的な豊かさを見ると必ずしも日本の方が良いとは言えない。TAYAMA 日本語学校や農村部で出会ったカンボジア人たちの意欲や生き生きとした姿を見ると、日本人よりもむしろカンボジアの方が心の豊かさがあるように思われた。それにもかかわらず日本人の価値観で一概に貧しいと決めつけて支援することは間違いである。また、相手が求める上で「支援」するとしても、何かを与えるだけは何も意味が無く、その後のカンボジアの自立、発展までを考え、それに協力することが本当の「支援」なのだと気づくこともできた。

この12日間で「格差」「幸せ」「豊かさ」など、これが正解と言えるものがないことについて考える機会が多くあった。答えがないものについて考えることは難しくもあったが、その分メンバーの中でも一人一人違った意見を持っていて、自分とは違う意見を聞き、こんな考えもあるのかと気づかされることはとても面白いものであった。普段大学で勉強しているだけでは出会えない日本各地の様々な分野を専攻する大学生と出会い、ディスカッションを通して意見交換したり、共に過ごす中でメンバーみんなと様々な経験を共有したりできた12日間はとても充実していて楽しいものであった。この日々で得た経験や知識は本当に貴重で、これを活かして今後につなげていきたいと思う。また、ツアーに参加したことでカンボジアという国が以前よりもっと好きになり、この急速に変化するカンボジアの姿をこれからも見ていきたいと思った。



## 【ツアーを通して】

筑紫女学園大学 文学部 2年生

私はこのベトナム・カンボジアスタディーツアーに参加した理由は、一度にいろんな分野のことが勉強できると思ったからだ。深い知識もなく、軽い足取りで参加を決意した。出発前に、友人からは「なぜカンボジア行くの？」と何度も尋ねられた。このとき私ははっきりと答えを出せず、あいまいに答えていた。私自身、「カンボジア＝発展途上国で貧しい国」というイメージを持っていた。実際にこの地に着き、私のイメージは一変した。街は活気で溢れ、人々が生き生きしていた。反対にどこが貧しいのだろうと思わせるくらい賑わっていた。日本とは違った雰囲気でも包まれていた。

いくつかの研修先を訪れ、私が一番印象的だったのは KURATA ペッパー、SUI-JOH である。自分たちの企業の話だけではなく、現在に至るまでのお話をしてくださった。倉田さんは「自分がやりたいこと、好きなことをする。」これが自分の気持ちを継続させる方法とおっしゃっていた。浅野さんは「思えば叶う」と教えてくれた。どちらも誰にでも出来ることではあるが難しいことである。最終的に自分の思いが最も大切だと気づかされた。「信じて続ければ笑える」「やりたいことをやって失敗する」この言葉が私に突き刺さり、背中を押してくれた。自分の経験すべてがこれからの自分を作っている。倉田さんも浅野さんもそれぞれの経験があったからこそ今こうしてカンボジアという地で働いている。カンボジアのために自分にしか出来ないこと、自分だから出来ることを自分の人生をかけて全うすることを身にしみて感じた。

それぞれの研修先で思うことはたくさんあった。ベトナムではクチトンネルや平和村、カンボジアでは病院、農村、日本語学校などさまざまな研修先を訪ねたことで、自分が今まで考えなかったことを考えさせられた。本当の豊かさとはここにあるのだなと思った。日本は経済的には豊かであるが、それは表面的であり満たされていないことに気づいた。

12日間を通して、グループで一つのテーマを共に考え、意見し合う中で自分にはなかった視点があったり、似ているようで違う考えだったり、毎日刺激を受けた。また、自分の意見の説明の仕方、言葉の選び方など、みんなの一つ一つの行動が私にとっては学べるものだった。将来なりたいものが明確にあるわけではなく、自分に自信が全くない中このツアーに参加した。自分をしっかり持ったみんなに励まされ、たくさんのことを吸収させてくれた。このツアーに参加したことでベトナム、カンボジアの現状を知った。自分のことをより知ることができ、視野も広がった。日本に帰ってきた今、私は本当の現状を周りに知ってほしいと思う。自分の目で見た事実を自分の言葉で伝えていきたい。参加して本当に良かったと思うし、自分にとっていろんなことを考えるきっかけになったツアーだった。引率の方、ガイドさん、研修先、そしてツアー参加者のみんなと出会えたことに感謝している。

## 【伝える】

名古屋学芸大学 ヒューマンケア学部 2 年生

伝えることの大切さ、私が今回ベトナム・カンボジアスタディーツアーに参加して最も感じたことだ。ツアー中のディスカッションを通して、自分の考えや気持ちを人に伝えることは自分を成長させ、人の心を動かす力を持っていることを知った。12日間を通して、私は今後次の2つのことを伝えていきたいと思った。

1つ目は、カンボジアの人の心の豊かさだ。カンボジアの人は寛容的であり生きていくことに意欲を持っている。私がカンボジアの人と日本人との違いを一番感じたのは、生きることについての捉え方だ。カンボジアの人は自分から行動し学ばなければ生きていけない環境にあるため、主体的に自分で生きていくという感覚を持っている。比較して日本人は与えられた環境で生きていくことができるため、学ばせられている、生かされているといったような受動的な感覚を持っている人が多い。この違いから、心の豊かさに差が出ると思った。日本では経済的には発展しているがメンタルヘルスの問題が深刻化している。このことから、物質的な豊かさは心の豊かさとは比例しないことが分かる。私は日本の子どもたちのメンタルヘルスの問題を解決していきたいと思っている。そのため、カンボジアのように自分とは全く異なる環境で生きている人の価値観や生き方を子どもたちに伝えていくことで、心を豊かにして生きていくことの大切さを知ってもらえることができると思った。

2つ目は、衛生面に関する知識だ。例えカンボジアの人は衛生面に不自由を感じずに生活をしているとしても、ゴミを路上に捨てる習慣やゴミ山の問題、感染経路や予防方法を知らないことにより拡大する HIV などの感染症の問題が深刻であること、農村での水に含まれる成分により引き起こされる病気があることは解決すべき問題だ。解決していくためには衛生面に関する知識を伝えていく必要があると思う。学校教育が貧困層にまで十分に行き届いていない現状から考えて、保健教育がなされるようになるには時間がかかることかもしれないが、保健教育を通して衛生面に関する知識を得ることは心身共に健康な人生を送っていく上での基盤になると私は考えている。そのため、保健教育の重要性を伝え貧困層にまで保健教育が行き届く環境を整えるとともに保健教育を行うことのできる指導者の育成を行いたいと考えた。草の根的に自身が保健教育を行っていききたいとも考えたが、指導者育成に努める方が継続的であり、より多くの貧困層にまで保健教育を浸透させることができると考えた。

12日間を通して、伝えるということについて深く考えた。自分が感じたことをディスカッションでどう伝えたいか、ベトナム戦争やポルポト政権について今後どう伝えていくべきか、12日間で見えてきたベトナム・カンボジアの現状を周囲にどうしたら伝えられるのか。

達成感と悔しさ、熱意と無力さ、価値観の獲得と喪失感などツアー中に多くの葛藤があった。その葛藤こそが自分を大きく成長させた。これほどまで素晴らしい気持ちを抱くことができる



経験が自分の人生であと何回感じられるだろうか。決して自分に特別な力があるわけではないが諦めずに自分の決めた道を進んでいきたい。

## 【心の豊は金より強い】

東日本国際大学 留学生 2年生

カンボジア…私は今回ツアーに参加する前はカンボジアについてアンコールワット以外に全く何も知らなかった。その私が今回のツアーに参加したのは普通のツアーではなくスタディツアーだからだった。私は韓国の留学生で日本に来る前、フィリピンで3年間仕事をしたことがある。カンボジアはフィリピンと同じく東南アジアの国だが、環境や社会全般的な部分が全然違った。

私がカンボジアに行ってみて一番心を感じたのは、その国の人々はスマイルだったことだ。韓国や日本では社会のインフラが良く出来ているが、その分、私たちはいつの間にか、私たちが幼い頃持っていた笑いを忘れてしまった。ツアーの中でカンボジアの歴史や観光地に行ったのももちろん良かったが、私は個人的に孤児院や、学校に行き子供たちのスマイルをみて私が子供たちから逆に色んなことを学ぶきっかけになった。

カンボジアには貧富格差が大きかった。韓国や日本だと高校まで卒業するのは社会的に当たり前なことになっている。しかし、カンボジアではお金がないと学べない環境があった。勉強したいが、勉強が終わらない子達が多くなり、それが教育の問題にもつながって、ポルポト政権とのカンボジアのすべてが繋がった。私がツアーに参加する前には全然知らなかったとばかりで、私は今まで何のために住んでるかを感じた。

ツアーの中で政府機関にも訪問して偉い人たちの話を英語から日本語で通訳する役割もした。私は皆さんに最大限正しく通訳するように頑張った。最初は不安が物凄く多かったツアーだったが、ツアーに参加した後の私はもっと成長して日本に無事に帰国した。

正直に話すと今回のツアーのことを知らなかったら、私が自発的にカンボジアに行く機会はありませんでしたと思う。私たちは現在情報化社会に住んでいて、毎日誰かと競争して生きている。私たちの純粋な心はまだ残っているが、その社会からたくさんのストレスを貰いながら生きている。しかし、カンボジアは違った。カンボジアは経済的に貧しい国だ。しかし、どこに行っても自分がどの仕事をしていても笑うことより大事なものはないと感じた。カンボジアから私はとても大切なプレゼントを貰った。

最後に私は今回ツアーに参加した皆さんに感謝している。今回のツアーでは自分は日本人ではないので日本語が完璧ではなかった状態で参加したが、スタッフさんたちや、参加者の皆さんからの応援があって私もこのツアーに夢中出来たと思う。それぞれ、言葉や文化は違いますが、歴史は繋がっていた。このツアーは私の人生でとても大切な1週間の記憶でずっとずっと残っていると思う。私はツアーに参加しながらこの1年間こんなに笑ったことがなかった。カンボジアで私は心の豊かより大切なものはないと深く考えた。日本に帰った今も夢みかけたカンボジアの1週間の生活を忘れずに一日を一生懸命生きている。今回ツアーに参加した皆さんとも良い友達になり、機会があればまた、カンボジアに行きたいと思う。

## 【最高の 8 日間】

北九州市立大学 外国語学部 1 年生

このツアーは、私にとって初めての海外であったが、参加して本当に良かったと心から思う。その理由は二つある。

一つ目は、多くのことを学んだからである。事前学習で、カンボジアの歴史や文化、研修場所について自分で調べていた。しかし、実際に自分で見て学び、まさに「百聞は一見に如かず」だと感じた。まず感じたのは、「格差」である。例えば、バスで移動しているときに外をみると、さっきまでは高いビルやイルミネーションが見えていたのに、気が付けば建物が低くなっていた。街中やショッピングモールで見た子どもは、少し太っていたり綺麗な服を着ていたりしたが、キリングフィールド付近で見た子どもは、細く、薄汚い服を着ていた。同じ国なのにこんなに格差があるというのは、日本ではないことだから、ショックを受けた。そして、HIV 病棟や孤児院、ゴミ山、農村など、様々な研修先を訪問し、ディスカッションや引率の方の助言から考えたことは、彼らにとっての満足の基準は何かということである。私、日本人の視点から見ると、HIV 病棟の環境は、部屋は外と繋がり、男女が同部屋であるなど、良いものとは思えなかった。農村での自給自足の生活、スカベンジャーの生活スタイルも同様である。そもそも、その水準より高いものがあるという概念自体がないというケースもあるかもしれない。私たちが何か支援をしても、もしかしたら彼らにとってはありがた迷惑であるかもしれない。例えば、農村の人たちは勉強をしなくても生きることが出来ているから、教育は不必要であると思っている人もいるし、スカベンジャーはゴミ山がなくなれば生計を立てる手段を一つ失い、生活が困難になるかもしれない。つまり、価値観は人それぞれだから、自分の価値観を他人に押し付けるのは良くないということを感じた。異文化を目の当たりにし、そのことは一層強く感じられた。本当の支援とは、価値観の押し付けであってはいけないということ、深く理解することができた。

二つ目は、最高の仲間と出会ったからである。全国のいろんなところから集まった仲間と過ごした 8 日間はとても刺激的なものだった。自分とは違う専門分野を学ぶ学生とのディスカッションでは、思い浮かばないような意見を聞き、自分の視野の狭さを実感した。研修先では、積極的に質問をする人がいたり、流暢な英語で質問する人がいたりして、自分はまだまだ勉強不足だと感じた。多くの人から刺激を受け、仲良くなり、ハードで充実した日程を共に乗り切ったからこそ、別れは本当につらかった。しかし、日本でもまた会いに行きたいと思えるほど仲良くなれたし、必ず会いに行こうと思った。

最高の仲間と共に、学ぶときは真剣に学び、楽しむところは思いっきり楽しみ、あつという間の 8 日間だった。不安もあったが、このように充実した 8 日間を送ることができたのは、引率の方、現地スタッフの方、JAPF スタッフの方、ツアーに参加したメンバーのおかげであり、心から感謝している。初めての海外がこのツアーで本当に良かった。

## 【カンボジア研修】

茨城大学 人文社会科学部 1年生

このツアーはあらゆる面からカンボジアを見ることができ、本当の豊かさ、本当の支援について考えるいい機会となった。今までは、途上国の子供たちが働いている写真を見て、恵まれていない、かわいそうとか、辛そうなどマイナスのイメージを感じていたが、実際にカンボジアの子供たちに出会って、自分の勝手な解釈でこの子たちのことを考えていたことに気が付いた。そのきっかけとなったのは王宮に訪れた時に出会った観光客にガムを売る子供たちだ。この子供たちと出会って「子供が働く＝辛い、可哀想、豊ではない」という考えが覆された。この子供たちは終始笑顔でいたずらなどをするとでもやんちゃな子供たちだった。ガムを売る行為以外日本の公園で遊んでいる子供たちと何ら変わらないのだ。また、電気ガス水道が完全に普及しておらず、裸足で自給自足に近い生活をしている途上国の農村も、可哀想だ、豊かではないと思っていたが、実際にカンボジアの農村では今の生活に満足している人が多く、みんな笑顔を見せていた。つまり、私は今まで自分のものさしでこの子供たちは豊かではないと決めつけ、勝手に同情していたのだ。これらのことから彼らは精神的に豊かであるといえるだろう。

その一方で、物質的な豊かさについてはどうだろうか。電気ガス水道が普及している日本に生まれ育った私のものさしで測るとカンボジアの農村はあまり豊かには感じない。しかし一方では豊かであると満足を感じる人も存在する。この物質的な豊かさについては精神的豊かさと同様に感じ方は人それぞれだろう。しかし、今のカンボジアの農村の生活はそこに住む人々自身が精神的にも物質的にも豊かだと感じているからと言って、そのままがいいのだろうか。私は違うと思う。確かに、豊かさには人それぞれの感じ方があるが、人として生きていくうえで最低限必要なものの基準が満たされてこそ、そこからは当人次第で本当の豊かさへと繋がるのではないだろうか。ここでいう最低限の基準とは衣食住、教育、医療である。教育を受けているから豊かという話ではなく、教育を受けられる環境に身を置くことで選択が可能になり、個々人の感じる豊かさに意思が伴われるということだ。つまり、一つの環境に身を置いて満足するのではなく、自らが選択した環境の中で豊かさを感じるのが本当の豊かさなのだろうと考える。最低限の基準をクリアして豊かだと感じる人もいれば、まだまだ先へと経済的豊かさを求める人もいれば、教育的豊かさを求める人もいるだろう。土台を作ることで選択を可能にし、豊かさは多様になるのだ。

このような本当の豊かさのための本当の支援とは何だろうか。現在のカンボジアに必要な支援は何だろうか。先に述べたような土台形成のために、まずは教育や医療を受けられる環境づくりが必要だろう。そこからいい職を手にし、給料をもらうことでカンボジア全体の衣食住レベルが底上げされるだろう。

このツアーを通して、本当に必要な、本当の支援を探すためにはその問題を取り巻く環境全体を見る重要性を学んだ。この研修に参加して心から良かったと感じている。

## 【現地で見た子供達の笑顔】

同志社大学 経済学部 1年生

私たち日本人はこんなにも平和で豊かなのに毎日愚痴ばかりこぼして生活していないだろうか。私達は毎日ご飯をお腹いっぱい食べることができるし、温かいお風呂に入ることができる。家に帰れば待っている家族もいて、雨や風をしのいでくれる頑丈な家がある私たちはそのようなことを当たり前だと思い、「幸せ」を感じられなくなっているのかもしれない。日本という国が経済的に、世界で有数の豊かな国だということを忘れて「ついてない」「お金がない」「政治が悪い」「チャンスがない」「苦しい」と言っている私達。一方、食べるものも十分でない、住んでいる家も藁葺でドアなどもない、月の収入一万円以下、しかし明日の希望に向かって、笑顔で一生懸命に生きているカンボジア人。彼らは、戦争がない日々、餓死しないだけの食べ物があることが、どんなに幸せなことかを理解している。私達はそんな当たりの幸せを、幸せと感ぜられなくなってしまった。本当にかわいそうな人間は、私たちなのかもしれない。

今回の研修では、カンボジアの子供達と触れ合うことがたくさんあった。タヤマ日本語学校では、教室に入ると拍手と歓声で温かく迎えてくれて私たちの緊張もほぐれた。発表の際も真剣に聞いてくれて、リアクションもとてもよく、発表していてとても気持ちよかった。質問の時も「銀閣寺が一番古い寺ですか」「東大寺の大仏は何mあるのですか」などほぼ全員が手を挙げていて、とても興味を持って聞いてくれていたんだと感じた。特に素晴らしいと感じた部分は生徒たちのあいさつなど、礼儀の正しさに驚いた。楽しく幸せな時間だった。

孤児院でも笑顔で歓迎してくれた。折り紙の折り方を説明するのも言葉が通じないので一苦労だった。それでも嫌な顔せずまねしてくれてとても嬉しかった。お昼ご飯を食べているときに感じたことは、麺の量がとても多くてびっくりした。食器も軽くだが自分で洗っていてすばらしいなと感じた。サッカーをしていた時に、皆裸足でボールを蹴っていた事にもびっくりした。特に印象的だったことはとてもかわいい子供達の笑顔だった。

ごみ山では、とても衝撃的な臭いでとんでもない量のごみの数に驚いた。さらにそこでお金になるものを拾って収入を得ている人たちがいることにも驚いた。その中には子供達も多くいて一生懸命毎日生きていくために頑張っている姿を見た。その環境の中でも子供たちは笑顔だった。

この研修に参加してカンボジアの歴史、環境、文化について詳しく知ることができた。幸せとは何なのか考えさせられたとても価値のある今までで一番濃い一週間であることは間違いない。この研修で出会った友達、引率の方々に感謝する。

## 【カンボジア研修で学んだこと】

関西大学 社会学部 2 年生

大学時代でしかできないことをやりたい。この願望のうちの 1 つに発展途上国へボランティアをしに行く、という考えがあった。そのため JAPF のカンボジア研修に参加することを決意した。研修に行く前のカンボジアのイメージは、支援している国や発展途上国という印象しか持っていなかった。

まず、カンボジアにはいろんな人がいて、様々な価値観を持っていると感じた。様々な価値観が存在する理由の 1 つとして、カンボジアには、都市と農村の発達度の差や貧富の差があり、その人それぞれにあった暮らしが多様にあることが挙げられる。都市では高いビルが次々と建てられており、道路の交通量も日本では考えられないものだったのに対し、農村では平地が広がっていたり、電気が通っていない場所もあった。将来は通訳になりたいという夢を抱きながら日本語学校に通う子供もいれば、その日暮らしの生活で学校へ通うことよりも家庭の労働力として働くことを優先しなければならない子供もいた。裕福な人たちの価値観は、カンボジアの産業再生のために観光業に力を入れたり、中国と連携しながらカンボジアの発展を望んでいる一方で、貧相な人たちの価値観は、カンボジア全体のことではなく、子供は教育より労働力として思わざる終えなかったり、農村でも生きてはいけるため様々なものを育てながら暮らしていたり、またゴミ山で生計を立てる人たちは農村で暮らすよりも設けが出るため自分で選択してゴミ山で過ごしている、と私は感じた。価値観が一致する人はいないのは当然であり、今回のカンボジア研修でディスカッションをするたび様々な意見を知り、自分の視野を広げることが出来たが、カンボジアの人々の価値観の差は大きすぎると、その原因を解決する鍵は、子供の教育にあると考えた。十分な教育を受けられないから、権力のある人、賢い人に従うしかない。カンボジア国内のこと、そして世界のことを知らないため、将来の選択肢が少ない子供たちがいる。そのため、ポルポト政権のような過去が起こったり、貧富のループが発生する。私は、孤児院やバイヨン中学校、フリースクールに行き、現地の人たちが子どもの教育懸命に取り組んでいる様子を実際に見たが、国の生活水準の向上と全ての子供たちの最低限度の教育をする道のりはまだまだ長いだろうと感じた。

他にも、カンボジア研修を終えてずっと引っかかっていることがある。それは、ポルポト政権についての子供への教育についてである。連日、多くのカンボジアの人に話を聞く度に、そのことについて質問を投げかけたが、皆、あまりはっきりとした回答をしなかった。私は単に質問の意味が理解されていないのだと思っていたが、最終日にアキ・ラーさんの地雷博物館で、「そのことについては誰にも話すことが出来ない、家族にさえ相談出来ない、自分の心の中だけで考える。政府にばれると危ない。」とおっしゃっていて、衝撃を受けた。「21 世紀の今でさえ、自由に発言できない国があるのだな。」と思った。世界では、そういう国もあることを知っていたが、まのあたりにすると何とも言えない気持ちになった。本当の豊かさとは何か、というディスカッ

ションをした際、カンボジアの方が現在の日本よりも豊かかもしれないと考えたこともあった。しかし、自由に発言できない国、自分で知り、学ぶ手段を与えられない国は果たして豊かなのか、疑問に感じた。まだまだ考えていかなければならないと感じた。

カンボジア研修を経て、本当に参加してよかったと心から思える。実際に訪れないと知る事ができないカンボジアの現状について実際に聞き、知ることができた。8日間、沢山学んだことは私のこれからの知識となり、私の視野を広くし、豊かにすることができたと思う。これから私は、自分がどのようにすれば世界に貢献できるか、どのような道を歩んでいきたいか、じっくり考えていきたい。

## 【将来への大きな一歩】

大阪教育大学 教育学部 2 年生

当たり前のように同じような毎日を過ごし、気づけば2回生も終わってしまう。今だからできること、感じられることがあるのではないかと思いこのツアーへの参加を決意した。私にとってカンボジアとは単なるアジアに位置する国の一つであり地雷が有名だったかなという程度の認知であった。しかしこのツアーに出会ってカンボジアを知る機会が訪れたのは運命だったのだとを感じる。

その日の研修を通して学んだことを基に、夜ディスカッションを行った。その中でどの議題においても「教育」が関連していたように思う。国の発展を考えた時、経済面においても精神面においても十分な教育を受ける機会を設けることが不可欠となってくる。前者で例を挙げるとすれば識字や計算などの基礎的能力である。この社会において経済を発展させていくためにはそういう能力が求められる。公平でない取引を無意識に行なわされることのないように、不当な賃金に気がつけるように、人々はお金に対する価値観を身につける必要がある。また早急にゴミ問題などの環境に関する問題においても立ち止まって考えていく必要がある。後者の例としては過去の歴史を知る機会を教育で設けるべきだという点だ。あれほど凄惨な過去である上に収容所などの建造物が残っているにも関わらず、国民のほとんどはポル・ポト時代についてよく知らないという事実が驚いた。その歴史を伝えることによって同じような思想を持つものを生んでしまうかもしれないという懸念は確かに一理あると思う。しかし自国で行われてきた事実と向き合い、二度と繰り返さないためにこの先どういった社会を築いていけば良いのかを考えることがなければ、本当の平和が訪れることはないのではないかと考えた。

しかし私が上で述べた発展は一方向的な考えである。例えば農村など一見発展が必要だと捉えてしまう土地の人々でもむしろ私たちよりも生き生きと充実した毎日を送っているように思えた。孤児院の子供達もキラキラとした目を持っていた。時に支援とは現地の人々から幸せを奪ってしまうこともありうる。それぞれの価値観の多様性を尊重しあいながら「笑顔」あふれる社会を目指していくことがとても重要である。

今回のツアーを通して改めて教育の役割を考えた。単に勉強を教えるだけでなく国の未来も教育次第でガラリと変わってしまう力も身をもって感じた。その国や時代によって求められる教育は変化していくと思うので、大学生活に戻っても、そしてその先も常にアンテナを張って考え続けたい。

最後にこのツアーで関わり出会えた全ての人に感謝したい。自分のやりたいことや今後の課題が少しずつ見えるきっかけとなった。ほんの一週間だったが私にとって忘れられない日々である。ありがたい気持ちでいっぱいだ。この先立ち止まることがあってもこの仲間存在を支えに進んでいきたいと思う。

## 【本当に必要とされていること考える】

宮崎大学 農学部 3年生

今まで旅行などでアジアの国々を訪れたことがあり、そこで現地の人々の暮らしを見てきた。たしかに私の生活(日本で一般的とされている生活)に比べると不便であるのかもしれない。しかし、何でも便利にして日本のような生活に近づけることだけが支援なのかずっと疑問であった。そのためこのツアーの目標は本当に必要とされている事は何か自分なりに見つける事とした。そして出した答えは「人々の視野を広げ、毎日笑顔でいられる生活をその国の人たちが作り上げること」である。

まず今のカンボジアにおいて、将来のことを生まれた環境によって決められている子供が多くいると感じた。例えば、農村で最低限の生活を送れるために学校に行かない、仕事が無いからごみ山に行く、親が貧困であるので孤児院で生活するなどである。まだまだ多くの可能性を持った子どもたちが希望も無く生きていくのはもったいないと思った。このように感じるのは上から目線であるとも考えたが、やはり私は他の世界や選択肢を知って欲しいと思う。なぜなら知って夢をかなえられなかったとしてもこの子供が将来自分の子供に教育を受けさせる良さに気が付くかもしれないからである。このようにこれからの発展のために毎日の生活だけ考えるのではない視野の広い人が増える事が重要だと思った。

次にこの研修でどのような支援が必要かという事ばかり考えて、私は人が幸せと感じるのはどのような時かという本質を忘れてしまっていた。最後のディスカッションの発表の結論で「笑顔」というワードが出たが、この言葉が私にとって一番しっくりくる言葉であった。便利にしても笑顔を奪うだけでは本当の支援になっていない。私とその土地の人の生活を変える事だけが支援であるのか疑問であったのは、笑顔を奪う事にならないかという不安があったからであると気づいた。研修の中でもお金が必要、薬が必要と言う話を何度も聞いた。確かに明日の生活に困っている人にとってはお金や物が問題を解決しているように感じるであろう。しかし、本当にそれは支援であるのか?と考えるようになった。以上のような一時的な支援もしつつ、我々は知っていることを伝えるという対等な立場での持続的な支援も重要だと思った。

そしてその国を変える事ができるのはその国の人々だけである。特に将来を担う子供が重要だと思う。しかし今のカンボジアの現状では教育の重要性を理解してもらう事から始まり、十分な教育をすべての子供に届けるためには長い時間が必要である。だが私はこの研修で出会った子供のキラキラとした目からカンボジアが変わっていくと確信した。

以上より私は人々の視野を広げ、自らの力で幸せな国にできることが必要であると考え。そのために私達にできることは持続的な技術の伝達といった形の支援が重要であると思う。カンボジアのこれからの発展が楽しみであり、私もできることをしたいと思った。



最後になりましたが、スタッフの方々をはじめ関係者の方々にはこのような学びの機会を与えてくれたこと感謝の思いでいっぱいです。ありがとうございました。今回見て聞いて、感じ考えた経験を将来に活かしていきます。



## 【カンボジアで感じたこと】

大阪府立大学 現代システム科学域 2年生

このツアーに参加したきっかけは大学内のポスターだった。このときは一度も海外に行ったことがなく、外国やその文化に興味があったのでこのツアーに参加した。初めてカンボジアに行ったとき、日本とは文化や風習、町並みなどがかなり異なっていてとても刺激的なツアーであった。以下文章にはカンボジアに来て感じたことについて書こうと思う。

はじめに、カンボジアに来て戸惑ったことはトイレの用の足し方である。カンボジアでは、日本のように紙と一緒に流さずにゴミ箱に捨てるのだ。これは上下水道の水道の水圧が弱くて詰まりやすいからだそうだが、日本のトイレとはずいぶんと違って衝撃的であった。それと同時に日本でどれだけ多くの紙と水を使ってきたかを知ることになった。また、その下水がそのまま川に流れるそうだが、衛生的に大丈夫なのかと不安になった。シェムリアップのゴミ山へ視察しに行ったときも異臭がすさまじくてゴミが散乱し、ハエや鳥が多くたかっていた。ここにはゴミ処理場がないらしいが、ここも衛生的に問題があると思われる。しかし、衛生的かどうかを決めるのは現地の人々であり、私のような日本人が決めることではないので、そこに人の価値観が入ると思われる。

カンボジアに来て、人々の活気にあふれた姿を何度も目にした。例えば、セントラル・パークやナイト・パークの市場の賑わいがすごかった。客引きの声や楽器を鳴らす音、人々の会話などであふれていて、スーパーマーケットやコンビニでの買い物が当たり前になっている日本ではなかなか見られない光景だと思った。また、TAYAMA 日本語学校の学生たちやクロサトメイ孤児院と農村の子どもたちも活気や明るさのようなものがあふれている。例えば、TAYAMA 日本語学校の学生たちのはきはきとした挨拶には驚かされたし、日本語でのプレゼンの時に熱心に聞く姿を見て学生たちのあふれ出るやる気を感じた。これは、貧富の格差があるカンボジアにおいて、日本のように教育が当たり前を受けられない子どもが多く、しかも TAYAMA 日本語学校は「誰にでも学び、仕事できる場所」を作るために建設された学校なので、学んだことを吸収しようとしてやる気が出ているからかもしれない。その他にも、日本のアニメが好きだからなどの理由で学んでいる人もいる。どの理由であれ、ここまでひたむきに学ぶ学生たちに舌を巻いた。また、孤児院や農村の子どもたちの明るさに私の心まで明るくなった。孤児院の子どもたちに至っては、貧困などの苦しい家庭の事情でここに来たのに、それを思わせないくらいに明るく無邪気なことに驚いた。ここでカンボジアの人々の朗らかな人柄が表れていると思う。このような活気ある若者たちだからこそあらゆる職業の選択肢を広げるために教育を行うべきだと思う。

今回のツアーはカンボジアの人々や町、習慣、課題などあらゆることが刺激的で勉強になることが多かった。この研修で感じたことを忘れずに次に生かしたいと思います。最後に、このツアーを計画してくれた引率の人達や現地のガイドの人たちに感謝の意を表します。

## 【カンボジアの子どもから学ぶ日本の教師の役割】

奈良教育大学 教育学部 2年生

私は、将来教師になりたい。今回カンボジアスタディツアーに参加して、教師の役割について深く考える機会を得たと感じている。今回の研修で感じた日本の教師が今、すべきことについて論じていこうと思う。

まず、TAYAMA 日本語学校の生徒たちと関わって感じたことである。TAYAMA 日本語学校の生徒たちの学ぼうとする意欲や学びに対する積極性は、日本の子どもにはあまり見られないのではないかと考える。質問の時間になると、私が質問をする時間を与えてくれないほど、日本に関する質問が次々と出てきた。これは、日本に対する興味や好奇心が生徒1人1人に溢れているからだと思う。カンボジアは、ポル・ポト政権の影響でまだまだ教育のレベルが低い。それに対して、日本は電子黒板や iPad の導入など、かなり教育のレベルは高いのではないと思う。しかし、児童生徒1人1人の様子を見てみると、日本の子どもは、授業中に居眠りをしたり、何か授業には関係のないことをしていたりなど、授業内容に興味を抱き、自ら学ぼうとする姿勢を見せている児童生徒は少ないと感じている。TAYAMA 日本語学校の生徒と接してみて、日本の教師の役割とは、授業や様々な活動の中で「おもしろい！知りたい！」という感情を児童生徒から引き出すことなのではないかと考えた。

次に、農村の子どもたちと関わって感じたことである。農村の子どもたちと関わって最初に受けた印象として、「1人1人がのびのびと生活している」ということである。1つエピソードを例に挙げたい。私は、交流の時間に私は5, 6人の子どもたちと折り紙をして遊んでいた。折り紙を1人ずつ配る際に、私から1番離れたところにいる子どもに、折り紙を配り忘れるということがあった。すると、その隣の子が「ここにも置いてあげて」と私に伝えてくれたのである。私は、この様子を見て、農村の子どもたちは、周りの友達を大切にしながらのびのびと暮らしているのだろうということを感じた。日本における学校現場では、いじめや不登校といった問題がたくさんあり、のびのびと生活できていない子どもたちも多くいる。しかし、農村の子どもたちからは、他人を排除するなどということは全く無く、みんなで仲良く楽しいことをしたいという雰囲気を感じ取ることができた。このことから、日本の教師の役割としては、「子ども1人1人がのびのびと生活できる環境を与える」ということであると思う。

カンボジアの子どもと実際に関わってみて、子どもたちの目の輝きに何度も心を揺さぶられた。あの目の輝きこそが子ども本来の目であると思う。「おもしろそう！やってみよう！」という感情に溢れ様々なものに興味をもちのびのびと生活をする、これが今の日本の子どもには必要なことなのではないかと思う。カンボジアは発展途上でまだまだ教育のレベルも低い、カンボジアの子どもから日本が学ぶことも多くあると今回のスタディツアーで感じる事ができた。



最後に、今回このような貴重な体験をさせていただいた引率の方々、現地ガイドを含め、JAPFのスタッフの皆さんには感謝の気持ちでいっぱいです。この研修に参加できてよかったです。本当にありがとうございました。

## 【今回のツアーを通して感じた事】

同志社女子大学 学芸部 1年生

元々東南アジアに興味があり友人の紹介でこのスタディツアーのことを知りました。出国する前はカンボジアのことについて少しでも知れたらいいなくらいの思いでした。しかし実際に現地に着いて8日間様々な場所を自分の目で見て感じて、驚かされたことが沢山ありました。

一つ目はカンボジアの教育についてです。今回のツアーではTAYAMA日本語学校やクロサトメイ孤児院、農村などで教育を受けることの出来る方々と接する機会がありました。置かれている状況は様々ですが、私たちが施設を訪れたとき皆一様に目が輝いているように見えました。日本語学校の生徒さんたちはみんな勉強熱心で日本の魅力についてプレゼンしている時でさえメモを取っている人がいるくらいでした。そんな彼らに将来の夢を聞いてみたところ、真面目で勤勉な日本人と働きたいと言ってくれる人がいて私はカンボジアの人たちの勤勉さには敵わないと思いました。孤児院の子どもたちはそこで社会に出るための特別な教育をしていると知り、13歳でも未だに文字が読めない子がいることに衝撃を受けました。また、農村でチアさんの話の中で、ここでは学力よりどういう風に学校を楽しむかに重点を置いている、という言葉がありました。私はこの言葉に農村の子どもたちの教育の機会の少なさだけでなく、都市と農村の格差を感じました。若年層が半分以上を占めるカンボジアで、教育の大切さが今後もっと農村にまで知れ渡り教育の機会が均等になれば、国のさらなる発展に繋がるに違いないと感じました。

二つ目は価値観の多様性についてです。これは私がカンボジアにいる間、常に感じていたことです。最初にKURATA PEPPERを設立した倉田さんのアリとキリギリスのお話によって価値観の多様性を理解しました。これは、キリギリスは夏の間バイオリンを弾いて遊んでばかりで、冬になり食べるものがなくなってしまったが、アリが夏の間のためにためていた食料のおかげで生き延びた、というキリギリスがアリに一方向的に助けられた話だと思っていました。しかし倉田さんは、夏の間はキリギリスの音楽がアリを励ましていたのではないかとおっしゃって一つの物語でも色んな見方ができることを知りました。その後も毎晩その日の研修に沿って行われたグループごとのディスカッションで価値観の多様性を実感しました。必ずしも正解が無いテーマの中で、私一人では絶対思いつかないようなアイデアにいつも刺激を受けました。特に最後のディスカッションのテーマであった“豊かさとは”では、豊かさの捉え方から模造紙の書き方まで様々で、驚かされました。このディスカッションがあったお蔭でこのツアーに参加した仲間たちのことをよく知ることができました。価値観の多様性を受け入れることができ初めて他人のことをより深く理解することが出来るのではないかと私は思います。

今回のツアーで出会った方たち、経験したことが今後問題に直面したとき、私の支えになればいいなと思います。本当に有難うございました。

## 【東南アジアと日本人の私】

福井大学 教育学部 2年生

私は『社会科教師を目指す者として発展途上国の現状を受け止め、それを子どもたちに伝えていけるように貪欲に“素材”を集める』というツアー目標で臨んだ。日本という先進国で生きている私たちにとって、発展途上国の現状は想像しにくいこともあり、世界についてほとんど知らない子どもたちに、どのように他国の現状を伝えられるだろうかについて事前に考えていた。私は以前大学の授業で、地理分野の世界の諸地域に関する授業を作る際に「日本と関連付けながら教えることが有効」ということを教授から教わった。理由としては興味関心を引き付けられる、概念を獲得できる、他国と日本を比較することで日本に対する理解を深めることにつながるといったことが挙げられる。私はこのツアーで得た経験を教育現場で役立てたいと思っている。そこで本文では、このツアーを通して特に印象的であった東南アジアの現状を踏まえつつ、日本と比較・関連付けて論じる。

特に印象的であったのは、ベトナムでは未だ反米感情を持っている人が多いということだ。確かにベトナム人にとってはアメリカが勝手に自分たちの領土に足を踏み込み滅茶苦茶にしたように見えるだろう。また、今でもベトナムでは枯葉剤の影響で障害を持って生まれてきてしまった子どもはたくさんいて、アメリカからさらに賠償金をもらうために署名を集めているということを知った。しかし、実際には確かにベトナムに被害者は多いが、アメリカにも被害者が多い。アメリカでも枯葉剤の影響で奇形児は誕生し、アメリカ国内ではベトナム戦争をきっかけに反戦運動が広がった。ドクさんは、ベトナム人に対し「アメリカを嫌いにならないでほしい」と願っている。それは、アメリカ人が加害者であるが被害者でもあるからではないだろうか？実際、戦争は政府の決めて行うことであるから、アメリカ全体が悪いというわけではない。しかし、ベトナム人は未だに戦争のイメージでアメリカを嫌っている。私はこの状況に社会科における“戦争と平和”学習の重要性を見出した。戦争を一つの視点から見てはいけない。また、自国のことだけでなく、他国の戦争における背景を知らなくてはベトナムのように誤解が生じてしまう。また、アメリカも枯葉剤の影響に目を背けず、真摯な態度をとることでベトナムと良好な関係を築くべきだ。日本にも同じことが言える。日本は未だ慰安婦問題を解決していない。本当に日本が韓国と良好な関係を築きたいと考えているのなら、朝鮮侵略を朝鮮からの視点でとらえ、自分たちがしてきた過ちを認めるべきなのではないだろうか。

また、カンボジア研修でカンボジアでは言動の規制が厳しくポルポト政権以降の歴史しか学べないことに対し、問題視していたメンバーが多くいた。私は社会科の重要性について目を向けてくれる仲間がたくさんいるということに喜びを感じる反面、日本でも政治的圧力が教育にも及ぼされていることを知らないのではないかと危機感も感じている。先ほど取り上げた、慰安婦問題について記載してある教科書を採用した灘高校は政治的圧力を受けることとなった。また、社会科教師は領土問題については絶対に子どもたちには教えなくてはならない。教えよう

で、北方領土などは日本の領土であることを生徒に教えなければならない。しかし、北方領土問題は一向に解決に向かわず、ロシアとの関係も悪化する一方である。社会科は圧力に左右されやすい教科だ。だからこそ CIESF はまずは理数教育の強化に努めているのだろう。しかし、社会科は自国を知り世界を知るために最も大切な教科であるためにその改善を図らなければならないと思う。しかし、社会科は教え方を誤ると洗脳にもなりかねない危うい教科だ。だからこそ多角的な視点から事情を捉える力を人々は教育の中で身に付けていかなくてはならない。この研修の中でたくさんのディスカッションを行った。ディスカッションは多角的な視点から事情を捉える力を育成する有効な手段だと思う。ぜひ教育現場でもディスカッションを積極的に行っていきたいと思う。

この JAPF の研修には世界を視野に入れた学びを行っている方が多く、ディスカッションが楽しかった。しかし私は日本の社会科教師を目指していることもあり、実践的な国際協力ができる立場ではないだろうと考えていた。だが、是非この研修に参加して得た経験を教育現場で生かしたい気持ちは強くあるので、私の教育によって発展途上国に興味を持ち、国際協力に携わりたいと思ってくれる子どもが増えてくれたら、それこそが私にとって“国際協力”なのではないかと思いはじめている。この JAPF での経験を活かし、今後も素敵な社会科教師を目指し精進していきたい。

## 【参加して本当に良かった！】

早稲田大学 教育学部 3年生

私がこのツアーに参加しようと思った理由は2つある。1つ目は、大学生活で何か1つ記憶に残るようなこと、大学生でしかできないようなことを成し遂げたいと思ったからだ。就職活動をきっかけに自分の大学生活を振り返った時、授業にそれなりに出席して、アルバイトをして、その稼いだお金で友達と遊んだりショッピングしたりする、という、平凡な大学生活しか送ってこなかったことに気が付いた。「何かに全力で取り組んだ」と誇れるものがなく、せつかくの大学生活をこのままで終わらせていいのか、という気持ちが生まれ、「とにかく何かをしたい！」という衝動に駆られた。そんな時にたまたま大学の掲示板で見つけたのがこのスタディツアーだった。2つ目は、途上国支援に興味を持ったからだ。留学にどうしても行きたかったのに金銭的理由で行けず悔しい思いをした経験や、地方と都会の勉強環境の違いを身をもって体感した経験から、「生まれた時点での格差」をどうにかしたい、どうしようもない理由で困っている人を笑顔にするような仕事に就きたい、と思うようになり、途上国支援に興味を持った。しかし、私は途上国を訪れた経験がなかったため、どういう支援方法があるのか、そもそもどういう課題があるのか、わからなかった。それを知るために、このスタディツアーに参加した。

参加した感想をひと言でいうと「参加して本当に良かった！」だ。やはり、現地に行って初めてわかることがたくさんある。私の途上国へのアバウトなイメージが見事に覆された。まずびっくりしたのは、中心部が予想以上に栄えていたことだ。高層ビルが立ち並び、高級車が走っており、おしゃれなレストランもカフェもたくさんある。「日本」が非常に浸透しているということにも驚いた。Panasonic、SONY、TOSHIBAなどの電機メーカー、TOYOTA、NISSAN、HONDAなどの自動車メーカーが特に多く見受けられ、技術が高く高品質な日本メーカーの商品は途上国で人気があり、人々の暮らしを豊かにしていることを知った。

一方、私が知りたいと思っていた「格差」もあらゆる場面で知ることになった。中心部に住む人々が先進国に劣らないような生活をしている一方で、地方では、電気が通っていなかったり、小さい子供たちが物乞いをしていたり、ゴミ山のゴミを拾って生計を立てている人たちがいたり、地理的/経済的理由で学校に行けない子供たちがいたり…日本では見ることのない光景・現実をたくさん目にした。また、急速な経済発展をしている一方で、道路が整備されていなかったり、ゴミが至るところに落ちていたり、ゴミがどんどんゴミ山に蓄積されていたりと、インフラが経済発展に追いついていない現実も見た。独裁政権により言論統制がなされており、言論の自由が与えられていなかったり、他国からの経済援助に頼りすぎて国力の低さが懸念されていたり、親世代がまともに教育機会を得られていなかったことから教育の重要性が認知されていなかったり、HIV感染についての知識が人々になく、かつ医療が衛生的に行われていないためにHIV感染者数が未だに多くいたり…問題は山積みだった。

これらの現実を目の当たりにして私が出した結論は「あらゆる諸問題を生んでいる根源的課題の解決に取り組めるような職に就きたい」ということだ。この答えは「王宮で見たストリートチルドレン」「草の根支援とトップダウン支援のディスカッション」から生まれた。王宮で子供たちが物を観光客に売りつけていて、その物を買うか買わないかで議論になったが、私は、あの場所で私たちが買わなかったとしてもあの児童労働はなくならないと思った。どうせ他の観光客からお金をもらいにいくだけの話だ。考えるべきなのは、児童労働をほったらかしにしている政府の姿勢や、児童労働が生じざるを得ないカンボジアの国としての現状だと思った。学校の草の根運動も同じだ。確かに、一校一校学校を建てて文房具や制服を寄付すること（＝草の根線）は“今”学校に行くことができない子供たちを救えるため非常に大切だが、子供が学校に行くことを義務化したり、子供を学校に行かせることができない親を救えるような制度、仕組みづくりをしたりするほうが大事だと思った。道路に落ちているゴミを一つ一つ拾うより、ゴミを落とさない国民づくり、ゴミを蓄積させないインフラ作りをするべきだと思った。そして、私はこのようなトップダウン支援、仕組みづくり、インフラ整備に携わりたいと思った。

このスタディツアーに参加したおかげで、「自分のやりたいこと」を見つけることができた。大学生活で記憶に残る思い出を作ることができた。最高の仲間に出会って、いろいろな議論を交わすことができた。途上国の良さを知り、また行きたいと思った。学習に意欲的な子供たちを見て、もっと自分も頑張ろうと思えるようになった。本当に充実した12日間だった。非常にいい経験ができたと思う。あのポスターを見たとき行動に移して本当に良かった。みんなありがとう！

## 【深い学び】

大分大学 経済学部 3年生

今まで海外に行った経験が無く、海外に行くなら就職活動前の最後の機会だと思い参加した。ベトナムについてはベトナムに留学していた友人から聞いて途上国というイメージはなかったが、カンボジアはまだまだ途上国というイメージがあった。しかし行ってみるとどちらも発展途上という言葉がふさわしくないほど進化した国であり、なぜ先進国と言われる日本では未だに支援だなんだと言っているのか、本当に必要なものを提供できていないのではないかと感じた。

ベトナムの研修では主にベトナム戦争について学んだ。ベトナムでは現在も枯葉剤の影響で奇形児が誕生している。ここだけを切り取ると「可哀想だ」と同情のような気持ちが湧いてくるが、ツーズー病院平和村を訪れた際それは一方的な押し付けの感情であると認識した。子どもたちに障がいはあるものの、それぞれ自分なりの楽しみを見つけているように思えたからだ。また、部外者である私たちを快く受け入れてくれた子どもたちや平和村の方の寛大さに驚いた。ドクさんとの食事の際ドクさんは良い意味で「過去は過去」という言葉を使っていた。戦争の歴史を知らないことでフラットな関係を構築することが可能であるという見方もあるが、私はやはり戦争の歴史を学ぶことは重要だと考える。戦争の歴史を知らないまま関係を構築すると些細なきっかけで同じことが繰り返される可能性があるが、互いに理解した上で関係を構築することでその歴史が真の過去になり教訓になると考えるからだ。この点で日本の政府は慰安婦問題などをないがしろにしており、ドクさんとは正反対の意味で「過去は過去」として清算しようとする姿が見受けられる。戦争をどのように伝えていくべきかについては、戦争経験のある各国がもう一度熟考すべきであると考えさせられた。

カンボジアでは言論統制について感じるが多かった。ガイドのキムサイさん、地雷博物館のアキラさん、農村を案内してくれたチアノルさん、カンボジア人であるこの方達が「これ以上は言論統制があるので・・・」と口を閉ざしたのが印象的だった。そのような状況にも関わらず、話せる最大限のことを話してくれた方々に感謝したい。言論統制については主にボルポト時代の歴史や現政権について自由がないのだろうと感じたが、どの程度まで許されるのかという許容範囲がわからず、さらにどのように統制されているのかということに疑問を持った。日本は言論の自由が保障されているが私たちはそれを最大限に有効に活用できているのだろうかと思いを改めて考えさせられた。

今回の研修を通して何においても他の人の意見を聞くことでより深く学ぶことができると感じた。それぞれの考えを理解することで自分の考えとの違いを整理でき、それが意見になる。私は今まで物事を深く考えたことがなかったが、同世代にはより深く物事を捉えている人がたくさんいると知りとても良い刺激を受けた。今後も今回培った考える力をさらに伸ばしていけるよう他人との意見交換を大切にしながら、さらに自分で考えながら生活していきたい。

## 【現地へ行くことの意義 ～カンボジアでの見聞を通して～】

早稲田大学 法学部 2年生

このスタディツアーが始まる前から、私のカンボジアのイメージの中にポル・ポトという人物は存在していた。日本の歴史の授業では進行具合や受験といった様々な要素のため戦後の世界の事象まで取り扱われることは少ないが、様々な書籍の中で触れられている。私の場合、近代以降の虐殺の歴史において最大の死者数を出したポル・ポトに多少の関心があった。そして彼の評価は極めて否定的であった。

なぜならば虐殺をしたという時点で、その人物の評価は否定的にならざるを得ないのである。なにかしらの評価をするとき、良し悪しを区分する一定の水準が必要となってくる。ある人物を評価するとき、人命は最重要というべき要素であるのはいうまでもない。そしてその人命を大きく侵害した場合、たとえ政策面において良い評価を受けていたとしても、全体として評価は下がってしまうのである。(毛沢東はその適例であろう。)ポル・ポトの場合、200万人ともいえる虐殺数の多さと後の世代に与える影響の深刻さから、彼の評価は否定的なものとなる。

しかしカンボジアに行ってみて、国際的なポル・ポトの評価と話を聞いたポル・ポトの評価に大きな差異がみられた。(スタディツアー中において引率も指摘していたことである。)バイヨン中学校のチア・ノル氏は否定的にとらえているように見えたが、孤児院の所長も地雷博物館のアキ・ラー氏も否定的にとらえているようには見えなかった。この背景にいくつかの原因が考えられよう。第一に、話を聞いた人物が農村に偏っていたからである。ポル・ポトは農村出身であったし、彼の政策は都市部の人間にとっては過酷なものだが農村部の人間にとっては過酷ではなかったことが推測できよう。ゆえにポル・ポトへの嫌悪感そのものがない。第二に、話を聞いた人物の中には肉親を殺された方もいたが、その方々がもう割り切っているからである。第三に、現カンボジア政府の存在があるからである。現カンボジア政府ポル・ポトの存在自体を教育で教えようとせず、また政権違反を厳しく取り締まっているようである。カンボジア国内全体での評価はさておき、少なくとも一部の人間はポル・ポトを否定的に評価していないようである。

今回のスタディツアーで一番悩ましい問題であると感じたのが評価の問題である。ポル・ポトのように国際的な評価と国内の評価の間に大きな差異がある時、対応を誤ると大変な事態となる。例えば国内の評価を念頭に「ポル・ポトはいいこと”も”した」といった発言は、それだけで国際社会から疑念や失望の目を向けられるのである。国際社会の常識を尊重するのは法学部生としても当然のことであるし、私もその立場を譲る意思のないことは明確である。しかしその一方で、いかにして負の歴史を繰り返さないための方策を私はまだ見出していないのである。教えないという方策は短期的に効果があるかもしれないが、国民が歯止めとなる可能性は少なくなる。他方日本のように不完全に教えた結果、負の歴史の評価が分かれる事態も好ましくない。このスタディツアーを通して私はカンボジアが将来陥るかもしれない未来を予感したのである。

## 【意識改革】

岐阜大学 応用生物科学部 1年生

この言葉は、引率のお二人が1番最後に空港で話していた言葉だ。お二人の話を聞く前から、このツアーを通して自分の中で意識改革が起きていたように感じていた。刺激的な毎日を過ごしていたからだと思う。どのような点で自分の中で意識改革が起きたのか、順を追って説明していく。

私の中で大きく分けて二つの意識改革が起きた。一つ目は、価値観の違いを大切にすることだ。これは主に、参加者の皆さんとのディスカッションの中で感じた。大学、出身地、年齢など様々な点で異なる参加者の中で、意見がバラバラになることも多かった。今までの私の日常生活の中では、異議を唱える人が少なかったように感じる。人の意見に同意する人が多かった。私もその1人だったと思う。だが、ディスカッションの中で多くの人が自分の意見を持ち、たとえ反対の意見であってもしっかりと発表していた。そのような姿勢を見習っていきたいと思った。

また、価値観の違う人と意見を交わすことは、自分にとって有益なことであるということにも気づいた。バッググラウンドが違う人との交流、私の知らない新たな知識を得られることが多くあった。価値観の違いには、良い面も悪い面もあるとは思いますが、価値観の違いの尊重を大切にしながらこれからの生活を送っていきたい。

二つ目は、実体験を大切にすることだ。KURATA PEPPERの倉田さんに言われて気づいたのだが、カンボジアは想像以上に発展していた。私の中で、カンボジアは発展途上国というイメージが強かった。日本では、カンボジアは地雷や、貧困というイメージを持つ人が多いだろう。今回のツアーを通して、カンボジアは今まさに発展しているという新しいイメージを持つことができた。これは、いくら本や、インターネットを使って勉強してもわからないことだろう。また、人の気持ちや考えも直接聞くことで、その人のことを明確に理解することができた。今回は、ドクさんやアキラさんなどの普段なら絶対に話を聞くことができない人から直接話を聞くことができた。この経験は私の中に大きな影響を与えているだろう。これからの人生の中では、人から聞いたことも参考にしつつ、自分を大きく変えることが出来るような実体験を大切にしていきたい。そのためにも、自分の興味を持ったことだけでなく、興味のないことにも色々挑戦して、様々なことを経験してみたいと思う。例えば、今大学で勉強していることと全く違うことだ。もっと広い世界のことを学んでみたい。

今回のツアーで大なり小なりたくさんの意識改革が私の中で起こった。意識改革を通して、自分を変えたり成長することができたと思う。この経験を大切に、また新たなことに挑戦することで意識改革の連鎖を起こしていけたら良いのではないかな。最後に、このような貴重な経過をサポートしていただいた引率のお二人や、JAPFの皆さんなど携わっていただいたすべての方に感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

## 【刺激】

昭和大学 保健医療学部 2 年生

ボランティア活動をしたかった自分は、何か自分が興味のある分野の活動がないかどうか探していたが見つからなかった。高校時代からの友人：桐生が大学であるポスターを持ちかけてくれたのがこのスタディツアーに参加しようと決めたきっかけだった。

ベトナムで一番印象に残っているのはやはり“オレンジージェント”についてだ。現在でも問題となっている枯葉剤の有毒性は催奇形因子となりうるのかいまだにわかっていないことを疑問に感じた。当時、化学兵器とは認識されていなかったが枯葉剤を使わざるを得ないアメリカ軍の状況も理解できた。しかし、戦争証跡博物館にはベトナム人の被害者だけでなく、米兵の被害者も残されており現在でもベトナムでは枯葉剤の影響と考えられる疾患や奇形をもって生まれてくる新生児が後を絶たない。枯葉剤の有毒性を研究し証明してアメリカ側が認めてしまえば莫大な賠償金をベトナムは得ることができ、多くの人が救われるはずだが、なかなか進まないことがもどかしく感じた。ディスカッションでは、なぜ同じ原因物質なのにそれぞれ違う部位で奇形が起ってしまうのかという疑問がでた。自分が気づけなかった視点から物事を見ている人とのディスカッションは学ぶことが多く、このスタディツアーで自分の成長材料の軸となった専門性の違いが刺激になった。

カンボジアではおそらくこのスタディツアーに参加した全員が正解のない世界を感じた王宮前での出来事が印象的だった。観光地で子どもが笑顔でこちらに駆け寄り、ものを売る姿に可愛いから一つ買ってあげようかなという気にさせる商法の裏には、いったいどんな事情があるのかを考えさせられた。自分が知っていたのはそういった子どもの親の多くは酒飲みやスモーカーで、子どもに稼がせたお金でお酒やたばこを買う親だということだった。しかし、ディスカッションの中には学校に行きたくて学校に通うためのお金を稼いでいるのではという意見やその日暮らしのお金を稼がなくてはならない子どもなのではないかという意見もあった。本当のことを知らないからどれも違うとは言いきれないが、マンゴーやヤシの実が一年中野生で実っているカンボジアで食べるものがないということは考えにくく、学校に行きたいなら観光客だけをターゲットにする必要はないと自分は考えた。4 年前に自分はカンボジアに来たことがあり、確かにものを売る子どもの数は減っていたと思う。チアノルさんの話にもあったが小学校に通う子どもの数は増えてきており、今の問題は中学校、高校と進学を選択できる子どもがまだまだ多いということで、働く子どもの数が減ってきていることが嬉しく思った変化だった。

実際にみて、知ることが大切なのだと学んだ 12 日間であったが、自分ひとりで同じ体験をしてもこれほどの学びにはならなかったと感じた。偏りのないさまざまな意見交換を頻繁にすることで自分だけの考えだけに収まらず、思考を深めることができた。

## 【私たちは世界を変えることができるか？】

大阪府立大学 地域保健学域 1 年生

私は、今回このカンボジアスタディツアーに参加して、物事を多面的に捉えることの大切さを学んだ。その理由は主に三つ挙げられる。

まず一つ目の理由は、カンボジアの歩んできた歴史にある。1975 年から 1979 年までカンボジアを支配したポルポト政権は、百万人以上の犠牲者を出した。トゥールスレン収容所やキリングフィールド、アキラ地雷博物館の見学を通して、このような凄惨な出来事がなぜ起こったのか、また、惨事を繰り返さないために、現代を生きる自分たちに何ができるのかを考えた。世界各地で今も続いている戦争には、周辺諸国との関係はもちろん国の経済状況、それに伴う、国民の間に広がる政権への不信感など、複雑な要素が絡み合っている。しかし国民一人一人が、目先の利益や偏った理想に振り回されることなく、幅広い視野を持ち、自由に論議できる環境をつくり、それを維持するために努力することで、独裁政権の暴走を防ぎ、平和な未来を構築できるのではないかと感じた。

二つ目の理由は、カンボジアの農村部と都市部の格差にある。高所得者向けのイオンモールや現地のレストラン、ホテルから一歩出ると、物乞いをしている子供たちや、粗末な住居を目にすることになる。また、シムリアップで見学した高くそびえたつ大きなゴミ山も、日本では決して目にすることのない異様な光景だった。しかし、農村部と都市部に格差があるからといって、カンボジアに住む人々が「豊か」でないのかというと、全くそんなことはなかった。日本に比べて、物質的、金銭的に劣っているということは簡単だが、現地の日本人学校や孤児院の生徒たちの、勉強に対する高い意識、知的好奇心、そしてまぶしいほどの笑顔は、GDP などの数値では示せないような「心の豊かさ」を教えてくれた。この経験を通して、豊かさを決めるのはその国に住む人々の心であり、第三者に勝手に押し付けられるようなものではないということを深く感じた。同時に、一方的な押し付けではなく、ゆくゆくは支援がなくても発展していけるよう、その国の潜在的な力を引き出すような支援の在り方が理想であると感じた。

三つ目の理由は、カンボジアの医療の現状にある。HIV 病棟の見学の中で印象的だったのは、リハビリという概念がカンボジアに存在しないことを知ったこと、そして現地の医師が「不足しているものはない」と断言するのを聞いたことだった。受けられる医療サービスの質や内容も、日本とは大きく異なっているが、現地の人々は「現在の医療に満足している」と答える。日本での当たり前が世界では通用しないということを肌で感じた瞬間だった。さらなる医療サービスの提供のために、様々な観点から国際社会が協力することの必要性について考えさせられた。

カンボジアで過ごした 8 日間は、自分の人生の中でも最も密度の濃い日々だった。しかし、このツアーの本質は帰国後にどのように生きるかにかかっているはずだ。「僕たちは世界を変えることができない。」その言葉の向こう側に広がる世界を、もっと見たい。

## 【初めて訪れた外国「カンボジア」】

同志社大学 経済学部 1 年生

行く前までの印象は正直世界遺産のアンコールワットだけだった。アメリカやドイツ、スペインなど王道な国に踏み入りたいと思っていたが、実際カンボジアでの研修は身になり身体の内面を擽る刺激的な経験をした。初めて行った国がカンボジアで「正解」だなど帰国して思い出に浸っていたら感じた。研修 1 発目は KURATA ペッパー、過去の苦い経験から、異国の地で花を咲かせた素晴らしさに感銘を受けた。特に、クラタさんの独占欲の無さと地域のことを最優先に考慮した経営的自立、また逃避を逃避と捉えずに常に前進する人的側面には驚かされた。他にはトゥールスレン収容所やキリングフィールド、アキラ地雷博物館では主にカンボジアの歴史を学んだ。収容所とキリングフィールドではカンボジアの闇と深刻な悩みを肌で感じた。収容所の生き残りは 7 人、キリングフィールドは殺害場ともあり暗い雰囲気に加えて、頭蓋骨が積み上げられた慰霊塔日本では見たことがなかったので言葉を失った。また、現地の子供達はその歴史を教えてもらえないでいるので、自国の暗い歴史を知らずにいられるのが良いのか悪いのか分からない難しい岐路に立たされているんだなど痛感した。話は一転、明るい側面を話すイオンモールや日本語学校がある。イオンモールは日本と比較しても劣るどころか最上階にはスケートリンク、日本にはない施設があり夏には 2 号店が完成すると聞いたので言葉は悪いが意外と発展しているんだなど思った。日本語学校ではすぐに圧倒された。やる気・熱量は日本では感じられない程で同年代で同じ学生としてこんなにも差があるんだなど思い、少し自分がダラシなく恥ずかしかった。それと同時に劣悪まではいかないが決して良いとは言えない生活環境においてしっかりと勉強できてきている現実があることについては無知だった。加えて、バス移動で外を眺めているとおよそ 2・3 キロメートルに 1 つの割合で小学校があることは絶対ないと思っていた。このことから、一見農村は都市部と比較して全てが劣っていると思われがちだが実際はそんなことはなかった。また、都市部では大きな建物が建設されていたがほとんどが中国語の文字が書かれていて中国の影響が非常に効いていた。現地に赴かなければ決して分からないことだった。この研修の中で一番印象に残ったのは HIV 病棟とアンコールワットです。HIV 病棟での研修は少し違った緊張感があり終わった後は疲れがどっときた。僕が質問した HIV 患者は最も病状が酷く見た目では性別の判断ができないほどだった。質問に対しての答えも聞こえず介護者が仲介するほど衰弱していた。質問の 1 つに今の希望は何かということに対して、死の恐怖に怯えているという答えが出た時はなんとも言えない雰囲気だった。ただ、お菓子を差し上げた時に触れた手は温かく今までになく生命力を感じた。病棟は日本が支援して建設されたと聞いたがあまりに簡素で患者に対する安全性に対して疑問符が浮かんだ。通路と部屋は普通に出入りができマスクが無くても入ることができるのは焦った。医者に関しては 2 年という日本と比較して 5 倍速いスピードで医者になれるという現実患者にとって危険だと思われる。土台がしっかりしないと全て崩れるからそこからしっかり叩き上げてほしい。



今日人類は科学と共にロマンと希望に溢れた未来を思い描き進化する中で相対化し物に対する価値観が変化する中で、当時と姿変えず佇む遺跡は私たちに当時の人々の思いや環境、各々が大切にしなければならない何かを回顧させているように感じる。これを実感させてくれるのが旅である。今回の研修はまた外国に訪れたいと強く思えて、本来の旅を満喫出来る体験であった。

## 【スタディツアーに参加して】

同志社大学 経済学部 1 年生

今回、カンボジアスタディツアーに参加し私は色々な経験をする事ができ、色々なことを感じることが出来た。引率の皆様を始め、JAPF のスタッフの方々に感謝している。

大きく分けてカンボジアの歴史、医療、現状について私の感じたことを記したいと思う。カンボジアの歴史については、トゥールスレン収容所、キリングフィールド、アンコール遺跡群、地雷博物館で学ぶことができたと思う。ポルポトという名前は聞いたことがあったが、約 40 年前のカンボジアで想像以上に悲惨なことがあったということが分かった。現地の人たちはポルポトのことを後世に伝えようとはしていないと言うことを聞いて、始めは何故だろう、負の遺産から逃げるのではなく伝えていくべきだと感じていた。しかし、ガイドさんや中学校での話を聞くにつれて伝えることが出来ない理由や背景を知ることができた。また、虐殺はしてはならないことだと思うが、ポルポトを日本人的な考え方で捉えて一方的に悪い人と決めつけるのも良くないかもしれないと感じた。ポルポトの人柄や政権を取った経緯、原始共産主義的思想に至った理由も知ることが出来た。ただ、カンボジアという国が観光業が盛んであり、トゥールスレン収容所やキリングフィールドに外国人が多く訪れる点、世界的に見ても貴重な歴史があるという点から考えてもポルポトや悲惨な過去をどの程度、どのように世界やカンボジア国内に伝え発信していくのかというのは重要な問題ではないのかと感じた。

また、アンコール遺跡群では遺跡の存在感の大きさに圧倒された。壮大で計算され尽くした岩の配置や一つ一つに意味のある壁画など全てが興味深かった。ガイドさんの話を聞きながら遺跡をまわることで新たな発見をすることもできた。遺跡の修復や観光客の増加によって引き起こされる諸問題など政府や民間、外国の支援など密接に関わり合い歴史的遺産を残して欲しい。

次に医療について感じたことを記す。医療については HIV 病棟や町の下水などの衛生面から不安な点が多いと感じた。医師不足や医療設備不足、国民の医療に対する意識や医療機関への信頼の低さなど世界基準の医療レベルと比べ不十分であると思った。私の考えではインフラや行政、国民の医療に対する意識など国としての高い総合力が土台としてある上で高いレベルでの医療が成り立つと思う。医療の現状を考えると、高いレベルになるのは簡単ではないが、経済発展も著しく、これから国として大きく変革していくと思うので、今後に期待し関心を持ち続けたい。

三つ目にカンボジアの現状について記す。

孤児院や農村、マーケット、風景、カンボジアの人々の話を聞き、先ほども述べたがカンボジアは経済的に発展途中であり、国として大きく変化している時期であると感じた。しかし、明るい現状と同時に経済格差の拡大や孤児の増加など暗い面も垣間見ることが出来た。マーケットやゴミ山でも日本では学校に通うような年齢の子供が当たり前のように働いていた。学校に行け

ないのもったいないし学校に通って欲しいと私は思うが、そこにも様々な難しい問題があることも知った。

最後に今回のツアーを通し、当たり前だが世界には色々な国があり、そこには人が生活していて、一人一人に家族や個性があるということを実感した。日本人としての常識や考えがカンボジアでの常識や考えとイコールではないし、カンボジアを日本に比べて優れているや劣っていると考えるのも違う。カンボジアにはカンボジアの良さがあり問題があるのだと感じた。ただ、何度も述べているが経済成長も著しく、国として大きな変革点であろう現在のカンボジアを他国の人として、日本人として観ることが出来たのは貴重だった。どうしても先進国と途上国と世界の国々を大きく2つに分けて考え、私たちは先進国である日本的に他国を見てしまいがちだが、カンボジアはカンボジアとして成長、発展して行ってほしいと強く感じた。今回のツアーで感じた、明るく勤勉なカンボジアの国民性をカンボジアの明るい今後に繋げて行ってほしい。

今回、多くのことを感じ様々な経験が出来て良かった。日本に戻ってからもカンボジアのことやツアーで出会った人たちとの思い出を思い出すことも多い。今年、私は20歳になるが、改めて日本人として、私として社会にどのような貢献が出来るか考える良い機会になった。本当に今回のツアーに参加できて良かった。これからもこの経験を忘れずに様々なことを考え学び続けたいと強く思う。